
君は君でいて

メロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は君でいて

【Nコード】

N0038B

【作者名】

メロン

【あらすじ】

「女の子にとって髪の毛は、命の次に大事なんだよ？だから、褒められると嬉しいなー、なんて」……………県立興賀高校に通う大翔。文化祭直前にクラスのアイドルに告白されて……。切ない学園ラブストーリー。

興賀高校

SIDE：夢

「おおきくなったら、おまえをおよめさんにしてやるよっ！」

「えっ……？　ほんとに！？」

SIDE：大翔

朝六時半。いつも通り起きる。目覚まし時計はセットをしていない。俺は毎朝六時半前後にふと目が覚める。小学校の時からこの時間に起きていたから、もう体が慣れてしまっているのだろう。

ふじしろ　たいしょう
藤城　大翔。俺の名前。朝は強い方です。

起きてすぐに朝食を食べる。食パンに味噌汁とご飯だ。和と洋の見事なマツチング。うん、これぞ現代風日本人。俺はご飯を食べるのは早い方ではないので、食べ終わるまで十分程度かかる。その後は制服に着替える。俺の通う、県立興賀高校。制服は男子が学ラン、女子はセーラー服という、典型的な高校生の制服だ。学ランはもう半年以上着ている。初めはなにか違和感があって嫌だったが、慣れてみると学ランもカッコイイものだ。鞆に授業道具を入れ、自転車に跨り、興賀高校へと向かう。

一年二組。俺のクラスだ。興高（通り名）は一クラス四十人前後、全部で六クラスある。その中で、一、二組は進学科だ。自慢ではないが、この興高進学科は県内でもトップレベルの進学率を誇る。と言っても勉強ばかりで遊ぶ暇がない、というわけでもない。平日は二時間、休日は三時間、きっちり真面目に予習復習をしていれば十分についていける。俺のクラスの担任に言わせれば、結局勉強は「やるかやらないか」らしい。

「おはよう！」

元気よく挨拶をして教室に入る。おはよー、と何人かが返事をし

てくれる。今日から十一月。このクラスになって半年ちよつと。もうクラス全員の顔と名前は一致するし、性格もほとんど把握出来た。親友も二人いる。入学当初は、同じ中学からの奴が一人しかいなかった（しかも女子）ので、とても不安だった。だが俺とそいつは幼稚園からの幼馴染なので、大変だね、頑張ろうね、とよく言い合っていて、お互いに支え合った。おかげでそこまで気持ち沈まないですみ、五月くらいにはもうクラスに溶け込めた。ただそいつは、静かで、積極的なタイプではないので、友達の輪の深い所まで踏み込みはしない。それでも、男子からはあまり注目を浴びないが、女子からは優しくて真面目と、良い人を通っている。いじめなどが無いのがこのクラスの良いところだ。

「おはよ、大翔くん」

「おー、おはよー！」

俺が席に着くと、そいつが挨拶をしてくれる。そいつは俺の右斜め前の席だ。竹内^{たけうち}陽菜^{ひな}。陽菜の家は、俺の家から三十秒もあれば着く。幼稚園から今まで、ほとんど同じクラスだった。優しくて、良い幼馴染だ。

ガラガラッ。ドアが開く。担任が入ってきた。

「起立、令」

学級委員が号令をする。

「おはよう。さて、とうとう文化祭まで一ヶ月を切ったな。今日の帰りのHRの時間で、文化委員を中心に、何をするか決めような」
手短く連絡事項を伝え、さっさと出て行く。一見冷たそうだが、実はとても優しい。陰でクラスのことをものすごくサポートしてくれている。石崎先生。担当教科は数学。三十五歳、既婚。少し暗めな性格は、自分の子供を一人亡くしているからだ。それでも弱音を吐かず、やることは必要以上にきっちりやる、強い先生だ。実は少し懂れていたりもする。

一時間目の授業道具を鞆から取り出す。数学。得意教科だ。定期
考査でも八十点以上をキープしている。この興高の数学のテストは
妙に応用問題を多く出してくる。それ故に数学が得意だと、胸を張
って言える。文理選択も理系に決めた。

「それじゃあ、藤城。ここは？」

「正弦定理で辺bを求めれば」

「おお、正解だ。ここは正弦定理を使って……」

少し呆け気味に授業を聞く。文化祭か……。何をやるんだろうな。
このクラスは面白いから、何をやっても楽しくやれそうだ。でも、
めんどくさいのだけはごめんだな。それよりも、文化祭誰と回るか
が問題。

二時間目、三時間目、四時間目。先生の授業を聞き流しながら、
そんなことを考える。四時間目が終わったら、昼食の時間だ。昼休
憩は一時間ある。その間に弁当を食べるなり、食堂でランチを注文
するなり、購買部でパンを買うなり自由だ。俺は教室で友達と弁当
を食べる。毎日おかずを交換したり奪い合ったり。授業中に溜めて
おいたテンションを昼休憩に一気に爆発させる。以前、教室の中で
小さいボールでサッカーをしてガラスを割ってしまったことがある。
あの時以来教室内の球技は控えることにしているので、そうは言
ってもバカなことを言い合って騒ぐくらいだ。

昼休憩が終わり、五時間目、六時間目、七時間目。週に一度八時
間目まである日がある。その日は体力調整が難しい。八時間目が終
わったらもう帰宅する元気しか残らない。まあ、七時間でも十分キ
ツイのだが。

帰りのHR。石崎先生が入ってくる。そして第一声。

「じゃあ文化委員、お前達でしきって、何をするか決めてくれ」

文化委員が前に出る。お化け屋敷、喫茶店、ゲームセンター、作
品展示……。黒板にポピュラーなものを書いていく。

「これ以外に希望があれば、どんどん言っ下さい」

教室がガヤガヤしたす。確かにどれも面白そうなのだが、決定打が足りないらしく、皆決めかねている。

「はい！ 映画撮影が良いと思います！ 去年私のお姉ちゃんがやっただけど、とても人気が出たって言っ下さい！」

そう発言したのは、学年のアイドル、吉村^{よしむら} 美羽^{みう}。髪は背中までかかるくらいのロングヘア。少し幼さが残る可愛い顔で、テストの点はクラスではいつも上位に入る。運動神経はそこそこ、誰にでも優しく、活発で、ものすごく人気がある。それなのに、女子からは妬まれない。人柄が良いからだ。男子からの人気はそれはもう絶大で、吉村に告白した人はもう十人は軽く越えている（ちなみに全員フラれたが）。まさにアイドルだ。

「それでは、映画撮影も加えます。白紙を配るので、各自希望を書いて、後ろの人が回収して下さい」

希望、か。そりゃあみんな、意見を出してくれた吉村の「映画撮影」に一票入れるよな……。でも映画か、何か役をやらないといけないんだろつな。めんどくさそうだなあ。

列の一番後ろの人が紙を回収する。俺は特に希望はないので、映画撮影、と書いた。小道具とかの役が良いな。

「……投票結果が出ました。ダントツで、映画撮影です」

やっぱりな。ああ、それにしても何をやるんだ？ 浦島太郎か？ かぐや姫か？

「さて、やる劇ですが……」

「はいはい！ 見る人見る人が切なくなるようなラブストーリーがやりたい！ 私が勝手に提案したんだから、ストーリーも考えてくるから！」

「みなさんそれで良いですね？ それでは吉村さん、宜しくお願いしますね」

HRを終える。吉村の独壇場だったなあ。それにしてもラブストーリー、か……。女子が張り切りそうだな。男子は恥ずかしくて積

極的に出来ないな……。結構辛いかも。それでも、あんな提案、吉村だから許されるんだよな。誰もが嫌がって決まらなかった学級委員だって、「しょうがない」って言って吉村が進んで立候補したし。宿題はお願いすると見せてくれるし。バカがつくほど優しいし。俺だって、吉村のことはすごく気になっている。

そんなことを考えながら、自転車に乗り、家に帰る。家までは三十分くらいだ。俺は部活はやっておらず、塾に通っている。塾に行くまでの時間に夕食を食べ、予習と復習をし、塾でみっちり勉強してから家に帰り、風呂に入って寝る。寝るのは毎晩十一時くらいだ。周りの友達は夜更かしをするので、寝るのは一時や二時が基本、と言っているが、俺は寝るのが大好きなので、早く寝る。最近買った安眠枕もあるし。良い夢が見れそうだ。

SIDE：夢

「あ、あれ……？　きのうつくったどろだんご、こわれてる……」

「ほんとだ……。だれかにふまれたのかな」

「……がんばってつくったのに……」

「お、おい、なくなつて。つくりなおそうよ。ぼくもてつだうからさ」

「ぐすん……ありがと……」

SIDE：大翔

朝の六時半。いつも通り。授業を四時間受け、昼食をとる。そして五時間目、六時間目、七時間目が終わり、八時間目。今日は八時間授業の日なのだ。八時間目は総合学習で、自習の時間。言い換えれば、遊びの時間。自習の時間ばかりは先生もうるさく注意をしてこない。真面目な生徒はしっかり勉強をするが、大半の生徒が友達と喋ったり紙ヒコーキを飛ばしたりする。進学校とはいえっても、総合の時間なんてそんなものだ。ただ、進学校の生徒は切り替えが上手なのかもしれない。遊ぶ時は脳みそが溶けるまで遊び、やる時は

気が狂うほどやる。……俺はそんなこと、上手く出来ないのだが。ついさっきまで遊んでいたのにいきなり勉強、と言われても無理だから人には言わないようにしているが、俺はその分勉強はかなり真面目に取り組んでいる。

「吉村さん、ストーリーは決まりましたか？」

「あ、うん！ 色々なこと、詳しく説明するね。文化委員じゃないのに出しゃばってゴメンね」

「いいよ、そんなの。それでは、吉村さんの話を聞いて下さい」

今日の総合の時間は遊び時間ではない。文化祭についてだ。ラブストーリー。ああ、歯が痒くならないだろうか。

「えっと、まずビデオカメラなんだけど、私の家には良いビデオカメラがないの……。誰か提供してくれる人、いませんか？」

「あ、おう。俺んちにあるぜ。結構綺麗に撮れる、デジタルビデオカメラが。それ持つてくるよ」

「ホント！？ 引田くん、ありがと〜！ じゃあビデオカメラはOKね。それで、配役なんだけど……」

配役か……。重要ポイントだな。吉村が黒板に書いていく。主役：三人（女子二人・男子一人） 脇役：十人 撮影・編集：四人 アシスタント：五人 小道具・雑用：八人

「ここまでで三十人ね。残りの十人は、当日は教室で映画を流す役と、当日までは全体的に大変なところをお手伝いね」

ああ、その役がいい。もしくは「小道具・雑用」で。主役なんて絶対に無理だぞ……。

「それで主役と脇役は、公平にくじで決めようと思うの。お互いに恨みっこなしだからね！

外れた人は希望する役に回ってね。ストーリーは80%くらい出来てるの。完成までもう少しだから、待っててね」

くじか……。フフフ。こういう時の運は、俺はかなり強い方だ。委員やら係やら、強運で逃げて来た男だ。かかってくるがいい。

全員に、数字が書かれた紙を裏にして選ばせる。もう主役と脇役が何番かは決まっているらしい。俺は念を込めて紙を選ぶ。どれにするか……真ん中らへんか……それとも意外性で一番端っここか……よし、右端から三番目の、お前だ！

紙は、17番と書いてあった。お願いします、この番号が主役じゃないですよねように。

「それでは主役の女子二人から発表します」

文化委員がドキドキの結果発表を告知する。

「サブヒロイン：29番」

「きゃー！ ウチウチー！」

一人目は山下か。確かに山下は顔も良い方で声も透き通っているので、案外お似合いかもしれないな。

「メインヒロイン：4番」

「うつそー！？ 私……！」

吉村だ……。まさか提案者がメインヒロインとは……なんというベタな……。

「それじゃあ主人公の男子……17番」

「俺だー……！！」

……見事に当選。

「大翔くん、主役、頑張ってね！」

HRが終わり掃除の時間、小道具・雑用係になった陽菜にそう言われる。

「変わってくれよ……。良いなあ……」

「でも、主役だよ？ カッコイイな！」

「はあ……まあやれるだけやってみるよ。応援よろしく」

「うん！ 名演技、期待してるね！」

内気な陽菜がヒロインになったらどうなっていたらろう。そんなことを思いながら掃除を終わらせ、学校を出る。塾に行き、家に帰り……いつも通りのことをし終えた後、俺は眠りについた。

SIDE：夢

「おべんとう、わすれた……」

「そうなの？ わたしのぶん、わけてあげるから……」

「いや、いって。おまえがおなかすくだろ」

「えんしよしないで。わたし、どうせいつものこすから……。はいどうぞ」

「……ごめん……」

SIDE：大翔

——サブヒロインは主人公に告白し、主人公はそれにOKをして付き合うことになる。サブヒロインはクラスでも人気者で、主人公自身も彼女ができた、と浮かれていた。ずっとラブラブな関係が続くと二人とも思っていた。でも、主人公は大事なことを見落としていた。自分の近くにはもっと素敵な女の子がいるのに。そう、メインヒロインだ。メインヒロインは主人公のことを幼い時からずっと想っていた。主人公自身は、幼馴染という近い立場だから、メインヒロインに対する自分の気持ちに気づいていなかった。主人公はクリスマスイヴのデート中にメインヒロインのことを好きになり、サブヒロインとは別れて、メインヒロインと付き合うことに決める。

「ありがちな、切ないラブストーリーですっ！」

放課後、メインヒロイン役の吉村が、サブヒロイン役の山下と主人公役の俺、さらに脇役の十人を集めて、物語の大まかな内容を説明した。

「えっと、当然雑用係とかよりも脇役は大変で、それより大変なのがサブ、メインヒロイン、主人公なの。セリフも出来るだけ早めに考えてくるから、覚悟しておいて下さい！」

「主人公って、やっぱりセリフ多いの？」

答えは分かっているが、一応少ない希望を持って聞いてみた。

「もちろん！ 藤城くんが一番大変かも……頑張つてネ！」

……やっぱりか。はあ、先が思いやられる……。

「演技も出来れば磨いておいてね！ やるからには『文化祭最人気賞』取るうね！」

文化祭まで一ヶ月を切っている。あまり多くない時間でセリフを完璧に覚え、さらに演技もしなければならぬ。クラスの皆が俺のことを見ながら撮影するわけだ、想像しただけでも緊張する。こういう時のくじ運は強いはずだったのに……。

「でもこれを機会に、吉村と少しでも仲良くなれたら良いな」
そんな期待を胸に、部屋の電気を消して眠る。

SIDE：夢

「どうした？」

「ひつく……。転んじやって……。ひつく……。ひつく」

「……バカ！ はれてるじゃないか！！ 運んでやるから、じっとしてろよ！」

「ひつく……。ひつく……。ありがと……」

「気にするなつて……。よつと。お前、軽いな。じゃあ走るけど、がまんしてくれよ」

「うん……。ありが……。とう」

SIDE：大翔

子供の頃は、昨日見た夢なんてあまり覚えていなかった。起きた瞬間に忘れることが多い。でも、年を重ねるごとに、起きてもすぐには忘れなくなる。そして、夢の内容もより鮮明になる。しかし、今日の夢は思い出せなかった。いや、思い出すのが面倒なだけかもしれない。夢なんて、所詮夢だ。そして現実、所詮現実だ。

今日も放課後、残ることになった。セリフが出来上がったので、

主役の三人で練習してみよう、ということになったのだ。

「ユウトくん、好きなの……。付き合って……。下さい！」

「うまーい綾香ちゃん！ー！ 気持ちがひしひしと伝わってくるよ！」

綾香とは山下の下の名前だ。ユウトは、俺が役を演じる、このストーリーの主人公の名前だ。

「じゃあ、次、藤城くんどうぞ」

「……いいよ、俺も……。お前のことが？ 好き？ だっけ？」

「もう！ 『お前のことが好きなんだ』でしょ！」

「ああ、そうか。ごめん」

駄目だ。どうにも緊張してしまう。やっぱり俺に主人公なんて、無理だ……。

「じゃあ私ね。……ユウトくん、無理しなくていいんだよ……？」

三人で短そうな文章を選んで、声を披露し合う。当然一番下手な俺、人並み以上には出来ている吉村、中学時代演劇部だったらしく、素人の俺でも惹きつけられるくらい上手な山下。

「綾香ちゃん、ホントにもう言うことない……」

「ホントに！？ ありがと。家でも練習してくるよ！ もっと磨いてきます」

「うん、お願い！ さて、藤城くん、私たちも頑張らなきゃね！」

「やれるだけやります。でもなるべく代役も考慮に入れておいてください」

「あはは。大丈夫だって！ 毎日放課後練習すればさあ」

「毎日ですか……。うへえ……」

今日は、五時頃には解放してもらえた。本格的な練習が始まれば六時頃までは教室でクサイセリフを何度も言わされる羽目になるだろう。それに俺は下手なので、家に帰っても練習をしなければならぬ。そうすると勉強する時間も減る。……雑用係が良かったのに、と何度も思ってしまう。雑用係と言えば、陽菜のことを思い出す。変わって欲しいなあ、と思いつつ、校門を出る。

SIDE：陽菜

ふう。部活が終わった。今日は木曜日で自主練の日だったから、早めに終わった。明日の予習は大変だから、早く帰ってやらないと。そう思いながら校門を出ると、目の前に大翔くんがいた。ドキツとした。どうしてこんな時間に……？　そうか、多分セリフの練習で残ってたんだよね。大翔くんが主人公をやるんなら私、ヒロインをやりたいかな。大翔くん、吉村さんと、仲良くしてるのかな……。吉村さん、可愛いもんね……。はあ、落ち込んでてもしょうがないかな。大翔くん、声をかけてみよう。

「大翔くん、今帰りの？　お疲れ様。もしよかったら……一緒に帰ろ……？」

思い切って言うてみた。胸がドキドキする。私、普通に振舞えるかな……。

「おお、陽菜。セリフの練習をしてたんだよ。もう大変で……」。陽菜はもう帰るのか？　部活は？」

「木曜日は体育館をバスケット部と剣道部が使うから、自主練なの。だから、今日はもうお帰りです」

「そっか」。陽菜は勉強も頑張ってるのにバレエ部でも頑張ってるんだよね。尊敬尊敬」

「そ、そんなこと……。大翔くんだって、頑張ってるよ」

「だといいんだけどな。でも陽菜、無理するなよ？　最近疲れていないんじゃないか？」

……。言われてみると私、最近は少し頑張りがちかもしれない。部活は試合でなんとか役に立てるようにと汗水流して練習して、勉強は遅れないように夜遅くまで頑張ってる。睡眠時間だって、最近はずいぶん少なくなってる。思い返してみれば、私、無理してたんだ……。大翔くんは絶妙なタイミングで最高の言葉を言ってくれる。本当に、優しい人。

クラスのこととかを話しながら家まで一緒に帰る。お互い家がす

ぐ近くだから、三十分くらいは大翔くんとお話をした。ずっと、胸がドキドキしてた。

SIDE：大翔

塾が終わり、風呂に入ってから自分の部屋へ。吉村からもらったストーリーの台本が目につく。吉村、頑張ってるんだろっな。俺も、頑張らないといけないよな。少しだけ練習をして寝よう。

SIDE：夢

「なんで……どこで落としたんだよ……」

「探し物？ 手伝うよ」

「お、おう、サンキューな……大切なものなんだよ……引越した拓也にもらったシャーペン……」

「うん、しっかり探そ！ 絶対見つかるから！」

「……ありがとう」

SIDE：大翔

今日もいつも通りの時間に起きたのだが、眠たかった。授業も少し寝てしまった。昨夜、セリフの練習に熱を入れすぎたせいだ。気がついたら徹夜で練習をしていた。ただ、その割にはあまり上達していないのが悔しい。セリフは何度も読み返したのである程度は覚えただが。あとは声と表情のみだ……それが、一番難しい。

「藤城……藤城！ 今は夜じゃないぞ！」

「はっ……すみません！！」

心地よく眠りについていた。いかん、重症だ。一時間目から今の七時間目まで、必ず1回は寝てしまっている。

「じゃあ藤城、眠気覚ましにここの助動詞、『に』は完了か断定か、どっちだ？」

「断定です」

「……正解だ。まあ、簡単だったからな……」

古典は、そこまで苦手じゃない。今のは判別が難しかったらしく、先生もまさか「寝ている俺に」答えられるとは思ってもしなかったようだ。だが、予習をほぼ完璧にこなしている俺にはノートを見ればたやすい問題だった。

いつもより気の張らない授業が終わり、HRも終わる。そして、地獄の放課後練習へ。

「藤城くん、今日はよく居眠りしてたけど、もしかして昨日徹夜で練習したのかな？」

「いやいや、昨日は朝までロサンゼルスに出張に……」

「あはは！ なにそれー！！」

俺は、頑張っているところは極力隠す。毎日しっかり勉強している、だとか、試合に勝つために部活後も自主的にトレーニングをしている、だとか、そういった隠れた努力はあまり人に言うものではないと思っている。妬まれるのも嫌だしな。出来ないから必死に頑張ってる、と言われればそれまでなのだが。

「今日も放課後大丈夫だね？ 頑張ろう頑張ろう！」

「おーす……。あれ、今日山下は？」

「綾香ちゃん、今日は喉が痛いみたいだから、帰った。元々綾香ちゃんは上手だし、無理して練習して悪化させるのも悪いしね」

「そっか……。二人きりか……。ドキドキするぜ……」

「ふふふ、ビシビシしごいてあげるわよ」

「……勘弁して下さい」

放課後、教室に二人きりという羨ましいシチュエーション。しかもクサイセリフを言い合う二人。

「それでも、俺が好きになったのはミカ、君なんだ！！」

「ユウトくん……。私も、私だって！！」

かなり省略を挟んだが、二十分程度で一通りやり終えた。

「ふう。とりあえず小休止入れよ」

「おー、お疲れー……」

「お疲れ様。それにしても藤城くん、本当に上手になったね。私たち、大分上達してるよね？ この調子だと、早いうちに撮影に取り掛かれるかも」

「おお、それは良いことだな。でも、カメラが回ると緊張する……」
「あはは、わかるわかる！」

そう言って吉村は椅子から立ち上がる。ふわっと長い髪が少しなびく。俺の目はその美しい光景に釘付けになっていた。

「どうしたの？ 私の顔に何かついてる？」

「い、いや……その、綺麗な髪だなーって思ってた……」

「え？ あ、ありがと！ ……えへへ、嬉しいなー。……ねえ、大翔くん。女の子にとって髪の毛は、命の次に大事なんだよ？ だから、褒められると嬉しいなー、なんて」

「そ、そうなんだ」

褒められたのがよほど嬉しかったのか、吉村の顔に優しい笑みが浮かぶ。

「さ、もう一回やってみよ！」

吉村は本当に一生懸命で。そんな吉村に、俺は惹かれ始めていた。

夜、セリフの練習をしながら吉村のことを考える。吉村とは、高校で出会った。入学した時から男子の間でかなりの人気があった。時間が経つごとに吉村の積極的で優しい人柄に皆気づき始めた。可愛くて、性格も良い。そんな子に、人気が出ないわけがない。俺もふとした時に吉村に目がいつてしまうこともしばしばある。吉村は部活には入っていないが、上級生からも告白をされたことがあるらしい。そんな吉村と、放課後一緒に練習をする。俺は幸せ者だろうな。

「次は、もっともつと楽しく喋りたいな！」

そんな高望みをしつつ、まぶたを閉じる。

撮影

SIDE：夢

「どうしたんだ？ 服がびしょぬれじゃないか」

「帰り道に水たまりで転んじやって……。体操服に着替えようと思つて教室に戻つて来たんだけど、今日は持つてきてなかったの……」

「お前、運が良いな。俺が持つてるから貸してやるよ。ほら」

「え！？ ありがとう！ でもいいの……？」

「いいつて。使つてないしね」

「……ごめんね。それじゃあ、借りるね。ホントにありがとう！」

「だからいいつて。照れるだろ。ついでに、一緒に帰ろうぜ」

「うん！ ……でも、恥ずかしいからちよつと外で待つててね」

「あ……ごめん」

SIDE：大翔

土日は計二十時間ほど寝た。疲れが溜まっていたのだろう。少し遅れ気味の勉強もこの土日で挽回した。さらにセリフの練習も欠かさない。充実した二日間だった。

そして月曜日。今週は八時間授業の火曜日以外は放課後練習をする、と吉村に言われた。二人きりでの練習を期待していたが、当然月曜日は山下と三人で、さらに水曜日からは練習に脇役も混じえてやったので、それは叶わぬ望みだった。脇役も含めると十三人、放課後の教室は賑やかな練習場所になった。今週はクラス中にも、文化祭が近づいてきた、という雰囲気漂っている。現に背景や道具の準備など、クラスの大半がもう撮影の準備を始めた。撮影は文化祭当日の一週間前。それまでに演技やセリフを完璧にしておかないといけない。とは言うものの、山下はもう練習に出なくても良いくらい上手いし、吉村もケチのつけようがないくらいの演技をしている。俺もかなり練習した甲斐があつて、演技力も声の大きさも

「フジ（俺のニッケームだ）、お前帰宅部なんだから演劇部に入れよ！」

「上手い上手い。もし俺が主役になってたら、俺絶対降板してたぜ」

「俺もしたいよ！ でもカズヤン、お前中学時代写真部だったんだ

「ははは。綺麗に撮ってやるよ。お前ファン増えてもらいたいな」

「ああ、もちろん彼女は欲しいからな！」

運動は得意ではないので、中学時代は写真部に入っていたと聞いている。とても気さくな奴で、いつもテンションが高い。俺の親友の一人だ。

「実は……俺もだよ、まえおつち」

「おええええ！」

まえおち——前岡まえおか翔太しょうた。もう一人の親友だ。俺と、カズヤン

「フジ、主役お疲れさん！でも、いいよな。美羽さまと共演出来て」

「うああ！ ふざけるな！ そんな不純異性交遊シーンを校内で流してもいいのか！？」

17

まえおつちは以前、吉村に告白した。まえおつちは男の俺から見てもかなりカッコイイ顔だ。運動神経が抜群で、体育ではいつも先頭を切って活躍するし、テンションが高めで、話しかけやすい雰囲気を出している。友好的で優しいので、彼女こそいないものの、女子からの人気も高い。だから俺は、まえおつちが吉村に告白した時は、吉村はOKをするんじゃないかと思っていた。俺も吉村には気があるし、まえおつちがOKされたら嫉妬するな、と思っていた。だが結果は見事に玉砕で、さすがのまえおつちでも二日間は大沈んでいた。噂によると、どうやら吉村は彼氏を作ったことがないらしい。吉村、ハードル高いよ……と思いつつ、俺とカズヤンで必死に慰めた過去がある。

カズヤンとまえおつち。高校時代にバカをやった友達とは、一生縁が切れない、というが、この二人とはまさにそんな感じだ。卒業して違う道に進んでも、暇なときには遊び、成人したら酒を飲み交わし。今後も長い付き合いになるだろう。それは直感的にわかる。

カズヤンやまえおつちとバカなやりとりをしたり、吉村や山下とセリフを言い合ったり。文化祭本番まであと二週間程度。全てが順調に進んでいる。俺自身も、早く撮影をしたい、出来上がった作品を観てみたい、と思いながら一生懸命に練習をし、今週も終わる。

SIDE：夢

「はあ……今から掃除をしに行かないと……」

「どうしたの？」

「いやな、事務室のガラス割っちゃまってさ。放課後、掃除をしに来いて」

「そうなんだ……。大変でしょ？ 私も、手伝うよ」

「いや、いいって。俺が割ったんだから」

「でも細かい破片とかあるし、一人だと不注意で怪我するかもしれ

ないし……。それとも、余計なお節介……かな」

「あ……。ああ。わかった。じゃあ手伝ってくれな。気持ち、ありがたく受け取るぜ。恥ずかしいから言いたくなかったけど、実は一人じゃ心細いなって思ってたんだ」

「うん、気にしないで！ それじゃあ、行こ！」

「ああ。ホントに、悪いな……」

SIDE：大翔

「昨日、俺の腕が一本無くなって、誰かから奪おうとする夢を見たんだよ……。マジ怖かった。なんか石崎先生とかまえおつちとか出てきて、俺必死に腕を欲しがっているんだよ」

「ははは……」

愛想笑いをする。カズヤンには悪いが、他人の見た夢の話ほど面白くないものはない。現実を起こったわけでもないし、夢だ何でも起こりうるのだから、特に話題にするものでもない。でもそういえば俺も、最近をよく夢を見ている。昔のことのような……。

「みんな、今週中にはセリフを完璧に暗記してきてねっ！」

今日は月曜日。撮影は来週の月曜日だから、ちょうど一週間ある。だが俺はもうセリフは完璧に覚えた。あとはカメラの前で良い演技が出来るかどうかだ。

今日は放課後の教室で、各自で練習。本番も近づいてきているので、クラス全員が残って作業をしている。

「大翔くん、あと一週間で撮影だけど、大丈夫？」

「おお、陽菜。どうだろう……。俺が本番に弱いのは知ってるだろ？」

「ふふ、そうだったよね。大翔くん、体育祭にしても合唱祭にしても、本番前には絶対トイレに行ってたし、すごく緊張してたよね」

「ははは、さすが幼馴染。俺のことはなんでも知ってるんだろ？」

「……！ そ、そんなこと、ないよ……」

顔を赤らめて反論する陽菜。

「まさか、俺の好きなおっさんのハゲ頭のタイプまで……？」

「竹内さん、ここちよつと手伝ってもらえるー？」

「あ、うん。ごめんね、すぐ行くからー！ ごめんね、じゃあ大翔くん、頑張つてね！」

ショートカットの髪を揺らしながら駆けて行く陽菜。しかし、陽菜のヤツ、俺に少し気があるのかな……。

午後六時になり、皆帰り出す。俺は吉村と二人で練習をしていた。結局教室に残ったのは俺と吉村だけになった。

「思ってみれば二人きりつて、久しぶりだね。私たち、あの頃と比べると、もう全然別人のように上手になったよね」

「ああ、確かに……。あの頃は俺ホントにセリフかみかみだったよなあ」

「そうそう、藤城くんは一番ひどかったもん！ でも、今じゃセリフ一つ一つにドキツとするよぉ」

そんなことを言われて、俺がドキツとする。吉村の笑顔は、本当に可愛くて。

「あと一週間、頑張ろうぜい！ じゃあ藤城くん、また明日！」
「うつす。また明日」

吉村が出て行く。後ろ姿をずっと見つめていた。胸の高鳴りが収まらない。学年で一番のアイドルと、話すどころか映画の撮影をするんだ……。吉村の笑顔を思い出すと、思わずにやけてしまう。

布団に入り、吉村のことを考えながら今日の日を終える。

SIDE：夢

「私……私立の中学校、落ちちゃった……。頑張ったんだけどな……」

「そっか……。公立の中学で、思い出作ろうぜ！ また俺と一緒にだな」

「うん……そうだね……」

「なんだよ……一生懸命頑張ったんだろ？ 受験に受かることが全
てなのか？ 落ちたからって、頑張ってきたことが水の泡になるの
か？」

「そうじゃ……ないけど……」

「失敗したんなら、次に頑張れば良いだろ！ 三年後には高校受験
もある、お前は勉強している分、他の奴より有利だな。努力、した
んだろ……？」

「うん……」

「頑張ったな……。よく頑張った。妬まれないように、見えないと
ころで勉強をものすごく頑張ってたよな。少し、気楽に行こうぜ」

「見ていてくれたんだね……。そんな言葉を……。誰かに言って欲しか
ったのかもしれない。ぐすつ……。私……。これからはもう少し、前向
きに頑張ってみる」

「ああ、それが良いよ。辛い事があっても、頑張れるだけ頑張ろう
な」

SIDE：大翔

八時間授業の火曜日も練習をし、水曜日から金曜日まで練習。今
週は土曜日も練習をした。そして日曜日。明日が撮影の日なので、
最終チェック。背景、小道具、カメラの確認等々。そして喉を痛め
ないように、主役と脇役の人は今日は早く寝よう、とのことだった。
ついに明日は撮影だ。クラス一丸となって取り組んできた。明日は、
最高の演技をするぞ。

SIDE：夢

「泣いてるの……？」

「……泣いてなんか……。ねえよ……」

「何か、辛い事があったの？」

「お前には関係ないだろ！」

「あ……。ごめん！ 気持ちも知らずに……」

「……あ、いや……ごめん、八つ当たりして。俺、どうかしてるよな。話、聞いてくれる？」

「うん、いくらでも聞くよ」

「実はさ……好きな子に、告白したんだよ。手紙で。でも次の日、俺の下駄箱に、渡した手紙がビリビリに破られて置いてあってさ……」

「え……そ、そうなの？ 告白、したんだ……」

「もう……うつ……フラれただけでもショックなのにさ……うつ……」

「辛い……辛いんだよ……」

「辛い事は、吐き出した方が、絶対に楽になるから……。もし、私でよければ……いくらでも聞くからね」

「うつ……ありがとな……ああ、今はずっと泣いていたのかな……」

「私、ずっと隣にいるから。いつまでも泣いていて良いよ……」

「お前、ホントに……優しいよな……。ありがとう、ありがとう……」

……」

SIDE：大翔

今日は目覚めが良い。今日はクラス中が待ちに待った、撮影の日だ。制服をきちんと着て、家を出る。

いつも通りの七時間授業だが、やはり皆そわそわしている。大半の人が授業に集中出来ていない。当の俺も、一時間、また一時間と終わる毎に、心臓の鼓動は早くなっていく。ついに七時間目も終わり、石崎先生がHRを素早く終わらせ、早速撮影の準備が行われる。

ストーリーは三十分程度で終わる。撮影は一時間あれば終わるそうだ。教室に背景がセットされ、間もなく撮影というところだ。俺は吉村の方をチラッと見た。さすがの吉村も緊張しているようだ。

「それじゃあ撮るぜ。準備してくれ」

カズヤンの声が響く。もう心臓がバクバクして気が気でない。神経を集中させて、なんとか自分を保っている。深呼吸を一度する。今から山下は「ユキ」に、吉村は「ミカ」に、そして俺は「ユウト」

に変身をする。この日のために努力をしてきた。そしてそれが今、形として残される。

「よし。それでは。5……4……3……2……1……」

SIDE：ビデオカメラ

「なあ、トモハル。そろそろ彼女いない暦〓年齢という方程式から抜け出してみないか」

「ああ、ユウト。もしそう出来たら、どんなに嬉しいことか」

「一体全国の高校生男子の何パーセントが彼女を欲しがっているんだろうな」

「所詮、男なんて欲望の塊さ。ほら、見ろ。我が憧れのアイドル、ユキちゃんだ」

「どっちがユキちゃんと付き合えるか、勝負しようぜ」

「ふふふ、望むところだ」

「ユウトくん！ このプリントを職員室まで運ぶんだけど、手伝ってくんない？」

「なんで俺が……」

「いいからいいから。女の子一人にこれだけの量、運ばせる気？」

「はいはいわかりましたよ、ユキさま。よつと、重いね……」

「ありがと……。……ところでユウトくん、今彼女いるの？」

「ぶつ。い、いきなりなんだよ……！？ いないよ！ いいだろー俺の勝手だろー」

「あ、ごめん。そんなつもりじゃ……。でも意外。ユウトくん、女子の間じゃあ人気なんだよ？」

「マジで？ それは嬉しいです……。お嫁さん募集中ですって女子に言っておいて下さい」

「あはは！ 本気にして誰か告白に来るかもよ……？」

「かかってこいやあ！」

「なあミカ。今日当たるからさ、英語見せてくれない？」

「いいよー。間違ってたらごめんけど」

「そんなの気にしないって。サンキュー」

「……あ、あのユウトくん！ きよ、今日一緒に……帰れないかな」

「今日……？ ワリ、今日は友達とCDショップ行く約束しててさ

……。ごめん、また今度な！」

「……そっか……。わかった……。それじゃ、また今度ね……」

「なあーユウトおー。もうすぐクリスマスだなあ。お前、彼女見つかったのか？」

「うるせえよコウスケ。お前こそどうなんだよ」

「実はよあー昨日、彼女が出来たんだよ。シングルクリスマスはごめんだからな。ま、お前も頑張れよ」

「え？ マジ？ コウスケ……。お前だけは彼女作らないと思ってたのに……」

「なあーユキ？ もう教室の掃除終わっていいだろ？」

「うん、もういいんじゃない？」

「よし。それじゃーな」

「ちよ、ちよっと待って。あ、あのユウトくん……。今少し時間あるかな？」

「……なんだよ……？ 時間は構わないけど」

「あ、あのさ……。今、付き合ってる子、いないんだよね……？」

「……そ、そうだけど……」

「ユウトくん、好きなの……。付き合って……。下さいー！」

「……」

「……」

「……いいよ、俺も……。お前のことが好きなんだ」

「嬉しい……ユウトくん……」

「トモハル、俺さ……ユキと付き合うことにしたんだ……」

「ホントか！？ おい……。……そうか……。ユキちゃんが選んだ奴だもんな。悔しいけど、幸せにしてくれよ」

「ああ……」

「おつそゝい！ こんな可愛い子を何分待たせるの！？」

「ホントにごめん！ なんでもおごるから許して！」

「もう、デートで女の子を待たせるなんて最低よ？ まあいいわ、今日はクリスマスイヴだし、水に流して楽しもうね！」

「今日は楽しかったね。特に遊園地で乗ったコーヒークップ。ものすごい速かったよね」

「ああ、あれにはびびったよ。また行こうな……。お、雪だ」

「ホワイトクリスマスイヴなんて、ロマンチックすぎ」

「そうだな。俺も今まで彼女とクリスマス過ごしたことないから、嬉しいよ……。それにしてもユキ、俺のどこに惚れたんだ？」

「ユウトくん、覚えてないかもしれないけど、私すごい助けてもらってるよ？ まだ出会ってから八ヶ月くらいしか経ってないけど、良いところたくさん見たし……。カッコイイし……。ずっと、ユウトくんのこと考えてたんだ」

「……そっか。俺も、ずっとユキのこと見てたよ……」

「嬉しい……。これから、いっぱい仲良くしようね」

「ああ……。ん……。？ あれは……」

「どうしたの？」

「ミカだ。俺らのこと見てたみたいだけど……。目が合うと走って逃げていったな」

「ミカちゃん？ ま、どうせいつかは皆に知られるんだし、良いじゃない」

「ごめん、俺ちよつと追ってくる」

「え……。？ なんで？ ミカちゃんなんか良いじゃない！ ねえ！

「！」

「はっはっ……ミカ！ やっと捕まえたよ……」

「ユウトくん!？」

「ミカ……なんで逃げたんだ……？」

「逃げてなんか……ないよ」

「ミカ……俺がユキと付き合うのが嫌なのか？ でもそれは……」

「……もうなんでも良いじゃない！ 私はユウトくんのが好きだったの！ それだけ！ 早く戻ってあげなよ……ユキちゃん、待つてるよ……？」

「ミカ……そうだったのか……。気持ちも知らずに、ごめん。……思い返してみれば、ミカとは幼稚園の頃から一緒に……。いつも俺のことを助けてくれていたよな。悲しい時はいつも励ましてくれたよな」

「……………」

「そうだ……俺もミカが好きだったのに、気付かなかったんだ。幼馴染だから、見落としていたんだ。でもさっき好きって言われてわかった。俺が本当に好きなのは、ミカなんだ！」

「ユウトくん、無理しなくていいんだよ……？」

「無理なんかしていない。ユキは優しいし、可愛いさ。それでも、俺が好きになったのはミカ、君なんだ!!」

「ユウトくん……私も、私だって!!」

「ミカ……ミカ!」

「ユウトくん!」

「ユキ、ごめんな……。別れてくれないか……。俺、ミカのことを、好きなんだ」

「……!? どうして!? OKしてくれたじゃない！ 私だって、私の方がユウトくんのこと好きだよ!!」

「ごめん……ごめんな……」

「どうしてそんな悲しいことを言うの!? ひどいよ……。ねえ、私、何でもするから……。お願い……」

「ユキ……俺は……。もうミカのことしか考えられない。何よりも、ミカ優先なんだ」

「それでも……! 私、ユウトくんのこと、好きなの……!」

「ユキ……ごめん……ホントにごめん……。それじゃあ……。な……」

「行かないで! ユウトくん! ユウトくん……!」

「ミカ、ユキと別れてきたよ……。俺の彼女に、なってくれるか……?」

「……喜んで!一緒に、歩いて行こうね」

Fin

SIDE：大翔

「終わった……!」

クラス中で歓声上がる。俺は頭がパニックになっていたので、どんな演技をしたのかすら覚えていない。それでも、すっかり出来た手応えは感じる。

「お疲れ……!」

カズヤンとまえおちにバシバシ叩かれる。もう本当に疲れた。体力、精神力共に限界だ。

「よっしゃあ! 上手く撮れてるぜ! 明日の放課後、大画面に映して皆で見ようぜ……!」

わ……と、再び歓声上がる。

「藤城くん、本当にお疲れ様……!」

「大翔くん、すごい良かったよ……!」

「ああ……」

吉村と陽菜が激励の言葉を述べてくれたが、もはや生返事しか返すことが出来ない。少しふらつきながら、家に帰る。今日は、塾も

サボってしっかり寝よう。そう思った。

SIDE：夢

「どうしたんだよ？ 元気ないな」

「あ……。何でもないの……」

「何でもないことないだろ？ 落ち込んでいるの、丸分かりだぜ？」

「ぐすっ…… ひっく…… ひっく……」

「お、おい！ 泣くなつて！！ ごめん、謝るよ」

「…… ひっく…… 違うの…… ラッピが……」

「ラッピって……？ お前が飼っていた仔犬？」

「ひっく…… そう…… ラッピがね、昨日…… ひっく…… 死んじゃったの……」

「…… そっか……。すごく可愛がっていたもんな。寂しいよな、悲しいよな。思いつきり、泣いても良いよ。俺の胸ならいくらでも貸すから」

「う…… うわああーん！ わああーん！！」

「大丈夫、大丈夫だって……。俺がずっとお前の側にいてやるよ」

SIDE：大翔

映画の撮影という大きな段落を終えたので、楽な気分で学校へ向かう。ただ、今日は昨日撮影した映画を見るので、考えただけでも逃げ出したくなる。俺は上手く演技が出来ていただろうか。恥ずかしくて見たくないが、あれだけ頑張ったんだからやっぱり見てみたい、という二つの気持ちが葛藤している。一時間目からあまり落着かない気分だった。今日は八時間授業の日だ。まだまだこんな状態が続くのだと想像して、滅入ってしまう。

チャイムが鳴り、四時間目が終わる。ようやく昼食だ。今日は授業がいつもより長い感じがした。

「大翔くん、あと四時間だね。見るの、恥ずかしいよね……」
と、吉村にいきなり話しかけられて動揺してしまう。かすかに覚

えているが、ラストシーンでは手をつないだはずだ。あの時は集中
していて意識しなかったが、今思うとすごいことをしていたんだな、
と思ってしまう。

「あ、ああ。でも吉村は、上手くやってたもんな、恥ずかしくない
じゃん。俺の演技を改めて見ても、笑わないでくれよ」

「笑わないよー！ 藤城くんこそ上手にやってたくせにい！ ま、
お楽しみにね」

そう言っ、吉村はいつも弁当を食べている女子のグループの方
へ行く。と同時に、まえおちがこんなことを言う。

「……美羽さまと、うまくやってるみてーだなー。いいよなー」

「ば、ばか、そんなんじゃないよー！」

「でも、まんざらでもないかもよ？ 俺が美羽さまに告った時、な
んて言っ、フラれたか知ってるか？ 『好きな人がいるから』だっ
てよ。お前なんじゃねーの？」

そう言われて、ドキツとする。まさか、吉村が俺を……？ そんな
な夢みたいなこと、ないよな……。

「そ、そんなわけないだろ」

動揺を隠せずにそう返事をする。いつもならとぼけて返すところ
だが、吉村のこととなるとどうも感情が入ってしまう。吉村のこと
を考えると、思わずドキドキしてしまう。

昼食を食べ終え、満腹で眠たい五時間目、六時間目、七時間目、
そして八時間目を終える。全ての授業を終え、普段なら皆疲れきっ
ているところだが、今日ばかりはクラス中がそわそわしている。石
崎先生が入ってきて、HRを始める。

「よし、今日は撮影した映画を見るんだったよな。視聴覚教室、借
りれたぞ。大画面で見れるぞ！ 昨日は皆白熱した演技だったから
な、先生も見るのが楽しみだ」

そう言っ、手早くHRを終わらせ、視聴覚教室へ移動する。映画
は、もうすでに見ることが出来るようにセットされていた。あとは

スイッチを押すだけらしい。

「それじゃあ、上映しまーす」

スクリーンに映像が映し出される。

教室での、トモハルとユウトとの会話。冒頭のシーンにして、ユウトが一番初めに喋るシーンでもある。

「なあ、トモハル。そろそろ彼女いない暦〓年齢という方程式から抜け出してみないか」

棒読みでセリフを言っているかと想像していたが、そうでもなかった。練習の時くらい上手に読めている。

……それから三十分、笑ったり、恥ずかしがったり、短くて切ないラブストーリーを見終えた。出来上がった一つの物語として見るのはこれが初めてだった。結局ユキは救われない、悲しい物語だな、と思った。

「ユキ、可哀想だったね……」

女子はだいたいそう言っている。ユウトの演技、カッコイイって言ってくれる人はいないものか。

「ユウト役の人、すごい上手だった……!!」

真後ろでそんな声がする。えっ！　っと思った。言ったのは吉村だった。

「ほらね、上手だったでしょ？　藤城くんのおかげで、すごい良い映画が作れたよ。ホントにありがとう！」

「いやいや、吉村が頑張ったからだよ」

まあおっちにあんなことを言われたので、吉村を前にすると思わず意識してしまう。

「この後、教室に来てくれない？　聞いて欲しい話があるの」

「鞆持ってくるの忘れたから、教室には行くつもりだったし、いいけど……」

「ありがと。先に行って待ってるね」

もしかして、告白だろうか……。俺の心臓は、はちきれそうなく

らいドキドキしていた。

両想い

視聴覚室で先生以外の全員が出て行くのを確認して、少し駆け足気味で教室に戻る。

吉村からの呼び出し。期待が広がるのと同時に、冷静さを保てないほど緊張している。

ガラガラッ。ゆっくりとドアを開ける。

「あ、藤城くん。ごめんね、突然呼び出しちゃって」

「いや、いいよいいよ。どうせ予定ないし」

「ありがとう」

……。短い沈黙が流れる。たった少しの間でも、息が詰まりそうになる。俺に何か言いたいことがあるのか？ どうして俺に？ まえおっちの告白を断ったときは、「好きな人がいるから」って？ その好きな人っていうのは、俺なのか？ 胸はドキドキ、頭はグルグルしている。

「改めて、お礼を言うね。文化祭の出し物、私が勝手に決めちゃったじゃない？ 『私だけ』 大変なら全然構わないんだけど、綾香ちゃんや藤城くん、クラスの皆にも大変な思いをさせちゃって……」

「そんなの、良いんだって。皆楽しんでやってたじゃん。映画撮影って、俺らも楽しかったし、当日も客いっぱい来ると思うよ」

「……ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいー……。実はあのストーリーね、ほとんどお姉ちゃんが考えてくれたんだー」

「へえ、すごいね……。でもなんかホントに切なかったよね……」

「うん、私も初めて読んだとき、ユキに共感しちゃってさー……」

「でも、ユウトはやっぱりちょっと情けないよな。初めからミカのこと好きだって言うておけばよかったのに」

「うーん……後から気づいたからさあ。ユキのことだって気になってたわけだし」

「でもなあ……。あ、そういえばあのシーンで映ってた佐藤、画面

に入りきらなくて体半分切れてたよな」

「そうそう！ あれはちょっと可哀想だったよねー」

映画のことについて、盛り上がる。なんだ？ 結局吉村は、俺と雑談がしたかっただけなのだろうか。

「それじゃあ、映画のお話はこれくらいにして……」

と、吉村が話題を変える。これからが本題なのだろう。急に心臓の鼓動が速くなる。

「私のつまらない長話、聞いてくれる？」

「ど、どうぞどうぞ」

「ありがと。こんな話、誰にもしたことないんだけどね……。んー、まあなんていうか、恋話、みたいな」

来た！ ……と思ったが、どうやら吉村の過去の話のようだった。

「私……ごめん、自慢じゃないんだけど、中学生の時、二十人くらいに告白されたの」

急に深刻な顔をし、そう話し出す吉村。

「一番初めに告白された時は、すごく嬉しかった。気持ちが舞い上がって、OKしようかと思った。でも、ふと気になって、『私のどこがいいの？』って聞いてみたの。そしたら、『可愛いから』って言われてさ。なぜか、気になったの。そりゃあ、可愛いって言われたら嬉しいけど。でも、『顔が可愛い』から好きなの？ 内面はどうでも良いの？ って思っちゃって……」

「へえ。じよ、女子は、顔が可愛いから好きって言われるの、嫌なんだね」

緊張して棒読み風に言ってしまう。こんなことを話すなんて、恐らく告白の前ぶれだろう……などと都合の良い解釈をしてしまう。

「他の子はわかんないけど……少なくとも私はそう思ってるの。その人からの告白、ちよつと残念かなって思ったけど、断ったんだ。でもそれからは何人にも告白されて。その度に『どこがいいの？』って聞いたたら、全員、『可愛いから』って。十人目くらいかな、『

可愛い』って言われてから、なんか私、男子のこと、嫌な風に思うようになったちゃったの。ううん、違う。私に告白してくる男子は、何か、嫌な感じがするの」

「い、嫌な感じって？」

「その、男子ってさ……彼女作って、その………エッチなこと……したいんでしょ……？ 十人も告白されたら、もうなんとなくそういうのがわかってきてさ……。この子、私と………エッチしたいんだろうなって。顔が良ければなんでもいいのかなってじゃあこの顔とこの体だったら、すごい性格が悪くても良いってことでしょ？ もっと内面を見てよ………って、思ったの」

「そ、そうなんだ……」

「私、今まで男子を好きになったことなかったんだ……。なんて、そんなこと言ったら女子には妬まれちゃうけどね。でもね、私が高校に入学してから、ううん、厳密には入学する直前に、好きな人が出来たの！」

「へ、へえ……」

「興高の受検の日……。私、試験のことで頭がいっぱいだったんだ。だから、行く途中に受検票を落としちゃったのも、全然気づかなくて。私、危うく受検出来ないところだったんだよ？」

「……それって、もしかして……」

「私が受検会場の教室に入った時、受検票がないのに気がついてね。鞆の中を必死に探したんだけど、どこにもないの。それですごい焦ってたから、どこの中学かの男子が、『これ、落ちてたよ』って、受検票を渡してくれたんだ。偶然、拾ってくれたその人と同じ受検会場だったの。その人の話によると、私の受検票、行く時の電車に落ちてたんだってさ。そりゃあ鞆を探しても見つかるわけないよね。ホントに偶然、その人も同じ電車に乗ってて。あと一步で、受検票は終点で回収されるまでその電車に乗ってるところだったんだよ」

「ああ、やっぱりな……。あの時の、吉村だったのか……」

「覚えてる？ その受検票を拾ってくれた人、藤城くんなんだよ？」

「ははは、覚えてくれて嬉しいよ」

ん……？ 俺はなんて返事をしただろうか。何を言ったのか忘れた。もう一秒前の記憶すらない。それくらい頭がついて来ない。

「すごい運命的なものを感じた。クラスも一緒になったし、私、入学してから藤城くんのことずっと見てた。誰にでも優しくするし、自分のことよりも第一に相手のことを考える、すごくお人好しな人。私、藤城くんの虜になってたあ……」

「……………」
まさかとは思っていたが……本当に俺のことが好きだったなんて……。

「私、生まれて初めて恋をしたかなー。もう毎日藤城くんのもので頭がいっぱい。いつ気持ちを伝えようか、告白するの、迷惑じゃないかな。そんなこと、たくさん考えてきた。でも、今日思い切って言っね。藤城くん、私、あなたのことが好きです。付き合ってください」

「……………」

告白……されてしまった。あの、吉村に。学年のアイドル、吉村に。俺なんかが、告白されてしまった。

「……………」

「……………」

すぐに返事をしなかったのも、重い空気が流れる。これ以上待たせるのは吉村も、精神的にキツイだろう。告白をして返事がなかなか来なかったら、それは心苦しいに違いない。返事をしないと、早くしないと。何か言わないと。でも頭が全然回らない。いいよ、つて言えばいいのか？ 俺も好きだよって？ 言葉が喉から出てこない。早く何か返事をしないと。気持ちが焦る。

「あ……………」

「あのさ！」

俺が何かを言おうとした時、吉村が割って出た。

「い、今すぐじゃ、そりゃあ藤城くんも気持ちの整理がついてない

よね……！ ごめん！

返事は……文化祭の日でいいから……当日、一緒に周る！ って声かけるから……その時に、返事を……下さい……」

吉村が頑張って言葉を絞り出している。ああ、今すぐの返事は確かに無理だ。もちろん俺の返事はOKなのに、緊張しすぎてもう言葉が出せないどころか身動き一つ出来ない。だから、その吉村の言葉を貰うことにした。

「……………わかった。その時までには、考えてくるよ」
苦し紛れにそう言うのが精一杯だった。

「う、うん！ いきなりこんなこと言って、ホントにごめんね……。そ、それじゃあ私、用事があるから帰るね！ バイバイ！」

吉村はそう言ってそそくさと教室を後にする。俺はその場でじつと立ち尽くしていた。先ほどの告白が夢なのではないかと思っていた。吉村からの告白……徐々に現実味を帯びてきて、俺は天にも昇りたい気分だった。

SIDE：美羽

「き、緊張したあ……」

でも、すっきりした。ようやく私の気持ちを伝えた。返事は、四日後だけど。

「藤城くん、OKしてくれる……かなあ？」

正直、不安……。でも、気持ちはいつか絶対伝えようって思ってたし。ああ、でも駄目だったらショックで学校来れないかも……。私、みつともないかな。撮影のラストシーンの時だって、藤城くんと手をつないただけですごくドキドキしたし……。もう頭の中はホントに藤城くんだけでいっぱい。カッコイイ藤城くん。超優しい藤城くん。思いやりのある藤城くん。すごく良い人の藤城くん。

「はあ、それにしても私、少し喋りすぎたかなあ……。告白の時つて、女子からあんなにベラベラ喋ってムードを作るもんじゃないよ

ね……。でも私、なんていうか、リードする方がどっちかというところ好きだし……」

でも、やっと言えたから。あとは、返事を待つだけだから。

……藤城くんが、OKしてくれますように。」

SIDE：大翔

夕方の六時。俺は教室を出る。ついさっきまで、ここで吉村と二人きりだった。そしてここで吉村に告白された。吉村が、俺のことを好き。そう思うだけで、口元がにやけてしまう。

「よし、文化祭……一緒に周るぞ！」

そう考えながら校門を出ようとした時、陽菜に会った。

「おお、陽菜。部活終わったのか。お疲れ」

「大翔くん！ どうしたの？ こんな時間まで」

「いや、ちよつとな……」

思い出して、またにやにやしてしまふ。いかな。

陽菜の顔をチラッと見る。当然吉村の方が可愛いよな、と、なんとも失礼なことを思った。そしてふと目につくのはロングヘアの吉村とは対照的な陽菜のショートヘア。

「ど、どうしたの？ 私の顔なんかじつと見て……」

「いやいや、やっぱり陽菜はショートが似合うよな」なんて思ってたんだよ」

「え！？ ……あ、ありがとう……」

——陽菜、俺、彼女が出来たんだ。そう言おうかと迷ったが、まだOKとは言っていないし、また今度でも良いよな、と思った。吉村の彼氏。クラス中の男子が望む地位。妬まれるのは怖い。でも、吉村と付き合えるのなら……。陽菜との会話は上の空で、吉村と付き合えることへの喜びを噛み締めていた。

SIDE：夢

「俺、興高受けるのやめるわ……」

「え！？ どうして!？」

「模試で、普通科C判定でさ……。もう受検まで、五ヶ月くらいしかないし……。レベル下げようかって。一緒の高校に行こうぜって言ったけど、ごめんな」

「諦めちゃだめだよ！ 辛い事があっても頑張ろうって、私に言ってくれたじゃない！ 私、あの言葉がどれだけ支えになってることか……。頑張ろうよ！ 諦めないで!!」

「私立は……。どうしてもお金かかるからさ、親を困らせたくないんだよ……。だから、どうしても公立に……」

「まだ五ヶ月もあるよ!? 私だって、不安なの……。ちよつとでも気を抜くと、落ちるかもしれないってすごい嫌な気分になるの……。でも、もうちよつと頑張ってみようって、勉強してるんだから……」

「……」
「お前は……。俺よりも勉強が出来るじゃないか……」

「そんなの、関係ないじゃない！ 私より、頑張ったらいいじゃない！ 無理無理って弱音を吐くところなんて、見たくないよ……」

「っ……。……。そっか……。結果が悪くて、マイナスな方にはっかり考えていたかも……。ありがとう、俺、やっぱり頑張ってみる」

「うん！ 頑張って行こうね……。一緒の高校に」

SIDE：大翔

水曜日、木曜日、そして文化祭前日の金曜日と、時間は流れていく。文化祭の準備は、教室内で流すビデオの設置や飾りつけのみになっていたので、呑気なものだった。俺は大役をこなした為、もう仕事のオフアーは一切来なかった。ここ三日間、俺はずっとボケーっとしていた。文化祭当日、吉村に返事をするのが待ち遠しいというのもあったし、なによりも、やはり吉村に好かれている、という事実は俺を情性のように過ごさせる十分な理由だった。この三日間はずっと吉村のことを見ていたし、頭の中ではほぼ一日中吉村のこ

とを考えていた。授業なんか頭に入りやしない。週三日通っている塾も、二回サボる程だった。本当に重症だ。恋の破壊力はすさまじいんだな、と実感した。

あれから吉村とは話していない。以前も俺からは話しかけなかったし、吉村自身もやはり俺のことを意識しているようだ。どうやら文化祭当日まで吉村と関わることはないらしい。一日でも早く吉村と話をしたい。明日は文化祭、興奮する俺は布団に入っても全然寝付けなかった。しょうがないので、起きて吉村のことを考える。そうしながら、夜が明けるのを待った。

うたた寝を何回かしたが、ぐっすりとは眠れなかった。気付けば、もう朝を迎えている。

今日は全校生徒が待ち望んだ日、そう、文化祭だ。眠気は取れないが、俺は元気だった。焦る心と踊る心。早く学校へ行きたい。いつもより早めに家を出て、俺は吉村の待つ、興高へと向かう。

「店番はちゃんと決めていたよな。それ以外の奴は、三時まで完全に自由だ。誰とどのクラスに周ってもいい。もちろん、買い食いもOKだからな。昼飯は各自に任せるぞ。九時開始だから、それまでは教室にいてくれ。ほい、それじゃあ楽しめよ」

石崎先生が簡単に連絡事項を説明する。クラスの奴らはだいたい、男子なら男子、女子なら女子と、少人数のグループがいくつも出来ている。カップルで周る奴なんて、このクラスにはいない。文化祭で初デートなんて、良い見せ物だ。でも、吉村といられるなら、どんな視線だって痛くないさ。と、そんなことを考えながら九時を待つ。時間が経つたびに胸が高鳴る。落ち着け、「俺でよければ、喜んで」って言うだけだ。緊張していても、それくらいは言えるはず。落ち着け、俺。

SIDE：美羽

八時五十七分……。もう少し。ドキドキする……。落ち着け、私。藤城くん、絶対OKしてくれるはずだから！緊張する。三分間、冷静な自分を保つので精一杯だった。そして、時計の針が九時をさす。クラスの皆が一斉に教室を飛び出していく。教室に人が少なくなった、今がチャンス。藤城くんに近寄り、私は声をかけた。

「あの……藤城くん、一緒に……周ろ……？」

ついに言ってしまった。お願い、藤城くん、お願い！OKって言って下さい！

「……………俺でよければ、喜んで」

——今日は楽しい一日にしようね！私は、そう思った。

SIDE：大翔

吉村を隣に、教室を出る。店番の奴に見られてしまったけど、まあいいや。どうせばれることだし。それよりも。吉村が隣にいる、それだけで胸が熱くなる。こういう時って、手をつなげば良いのだろうか。いきなり手は、早すぎるだろうか。おろおろと狼狽していると、

「手……つなご？」

と、吉村が言ってきた。こういう時は、男の俺がリードするもんだよな……。情けない、と反省する。俺は吉村の右手をそっと握る。少し冷たかった。吉村と手をつなぐ。吉村の体温を手に感じ、これ以上ないほどの優越感と満足感を味わった。

「うわー……さすが三年生、手が込んでるよね」

「ホントだな……。出来れば、入りたいんだけど」

「私だって怖いんだから。藤城くんに抱きつこうかと思ってるんだから、そんな頼りないこと言わないでよ」

三年六組主催のお化け屋敷を目の前に、そんな会話をする。受験間近の三年生だが、文化祭には参加する。センター試験目前のこの時期に文化祭で出し物をするあたりが、なんとも余裕が伺える。い

や、というよりも、文化祭の計画や準備やそういったものが息抜きになって、実際のところ良いのかもしれない。

「それじゃあ、入るかあ……」

覚悟を決めて入る。入った途端、冷たい空気が肌に触れた。クーラーでも効かしてあるのだろうか。それに、妙に静かだ。こんな雰囲気で脅かされたら、そりゃあびつくりするだろう。

「オー……ン……ン……」

「キヤー……」

掃除ロツカーからいきなり飛び出してくる。ありがちなパターンだが、正直俺も驚いた。掃除ロツカーを目立たない位置に置いてあるのがネックだ。よく考えてある。その後もベタな物から手の込んだ仕掛けまでバラエティ豊富で、かなり怖かった。吉村は終始キヤーキヤー言っていた。

「……抱きついてこなかったな」

「え？ 抱きついてほしかった？？」

「い、いや……なんというか……」

「もう、しょうがないなあ」

吉村はそう言いながら、俺に体を近づけ、そつと腕を背中に回してくる。柔らかい、吉村の体。吉村はすぐに体を離して、

「えへへ。満足??」

そんなことを言う。もちろん、大満足だ。証拠に、俺の下半身が反応している。収まるまで、俺は少し前屈みになって歩く不審者になっちゃった。

その後はクレープを奢ってあげて一緒に食べたり、ゲーム店で遊んだり、体育館で吹奏楽部の演奏を聴いたり、茶華道部や写真部の展示を見たり。そうこうしているうちに昼飯時になったので、良い空き場所はないかと探す。

「あ、あそこの教室、使ってなさげ」

「あそこは……生物教室か。誰もいない今のうちだな。皆場所を求めて、ここも探しに来るはずだから。鍵閉めとけば入って来ないだ

ろっ」

ありがたく、生物教室を借りる。先ほど調達してきた、焼きそばとカレーライス。机で向かい合って、二人で食べる。

「吉村と文化祭一緒に周れるなんて、夢みたいだ」

そんなことを言ってみる。

「私だってですよ！ 不束な彼女ですが」

「とんでもない！ 吉村は最高の彼女さ」

「えへへ、ありがと。……あのさ、お互い苗字で呼ぶの……やめない？ 大翔くんって呼んでいいでしょ？ 私のこと、み・うって呼んで……いいよ」

もう下の名前で呼び合うのか。すごく恥ずかしいな。でも、確かにカップルで苗字で呼び合うのは何か不自然な気がするもんな。

「わかったよ、美羽」

「大翔くん」

「美羽」

「大翔くん」

「美羽」

無意味に何度も下の名前で呼び合う。なんて恥ずかしいことをしているのだろう。でも、こんな小さなやり取りが楽しい、嬉しい。美羽が好き。誰かを好きになると、周りのことなど見えなくなるらしい。実際今の俺の視野には、美羽以外の誰も映らない。

昼飯を食べ終えた後も、色んなクラスを周った。時間も程よいくらいになり、最後の出し物、一年二組の映画を見ることにした。

「そういえばこの映画、なんていうタイトルだったけ？」

「タイトルも知らずに主人公やってたの？？ あはは、大翔くんらしい。……って言っても良い題名決まらなかったから、『ナモナクラブストーリー』なんだけどね」

「はは……なるほど」

一年二組の教室に入る。二人で一緒に入ったので、当然店番の奴が凝視してきた。店番はというと、カズヤンとまえおっちだった。

「おおー、フジじゃん」。自分の映画見に来るとはねえ。しかも、美羽さま付きで」

「俺達付き合うことにしたんだよ」

「見れば分かるって。お似合いだしなー。良いなあフジは彼女が出来て」

まあおうち、怒るかと思っていたが、全然そんなことはなかった。確かに、誰と付き合おうと俺の自由だしな。本当によく分かる、良い友達だ。

「ああ、客としてこの映画を見るなんて、不思議な気分だよな」

「ホントホント。それに私たち、主役同士だよ？」

「思い起こせば苦勞の数々……」

「大翔くんは、ホントに頑張ってたよ。家でもすごく練習してたんでしょ？」

「ははっ……バレてたのね……。お、さあ、始まるぜ」

「うん。緊張するね……」

そうして俺達は、俺達の作り上げた、短いけど壮大な物語を鑑賞した。

「はあ……。やっぱり、しこりの残る、悲しい終わり方だよな……」

「ああ……ユキはホントに救われないな……可哀想」

「切ない、というよりは痛いストーリーだったかなあ」

「まあ良いんでねーの？ 役やるのだって、それなりに楽しかったし」

映画の感想を言い合っているうちに、時計は三時を周る。皆そろそろと教室に帰ってくる。しばらくして石崎先生もやって来て、

「月曜日は休みだからなー。あとは特になしだ。それじゃあ、片付けよう」

そう言ってHRを終わらせた。後片付けは、店番にならなかった人達の仕事だ。俺と美羽も後片付け役だ。

「結構人来てたよなー」

「まあ映画とかやってたの、俺らのクラスだけだったしな」

「それに映画見てる途中で、出ていった奴とかいなかったぜ？」

そんな会話が聞こえてくる。案外人気あったのかな。良かった良かった。

「大翔くん、あとはこのスクリーンを視聴覚教室に返してきたら終わりっす！一緒に行き？」

「ああ、いいよ」

美羽に誘われる。一人でも十分持てる重さなのだが、そんなことは関係ない。早く片づけを終わらせて、美羽と一緒にいたい。スクリーンは俺が持ち、美羽と雑談をしながら視聴覚教室へ向かう。スクリーンを収めると、美羽が、

「ここ、座ろ？」

そう言っただけで視聴覚教室の座席に座り、俺を手招きする。

「よっこいせ。あゝ、疲れたな」

「うん。今日は、ホントに楽しかったよ！ありがとうね」

「いやいやいや、俺だって楽しかったよ。美羽と一緒にいられて」

「そんなこと……恥ずかしいよ……。でも、嬉しい……。私、ずっとずっと大翔くんのこと好きだったんだよ？」

「……俺も、美羽のこと、見てた。俺だって嬉しいよ。今も胸がドキドキしてる。俺が美羽の彼氏だなんて、信じられないよ」

「よかったぁー……両想いで。いっぱい、仲良くしようね」

「ああ。楽しい思い出、たくさん作ろうな」

自然に、お互いの体を寄せる。香水の匂いの奥から、美羽の香りがする。女の子の、甘い香り。すらっと長い綺麗な髪。形の良い顔の輪郭。そして、ふっくらとした唇。

お互いに目をつむる。こういう時って、やっぱり俺からだよね。美羽は目をつむったまま、待っていてくれる。緊張していて、上手に出来るだろうかと思ってしまう。

俺は覚悟を決めて、唇を近づけた。触れるか触れないかくらいの、ぎこちないキス。すぐに唇を離す。初めてだったので、何をどうす

れば良いのか分からなかった。それでも、美羽の唇は柔らかくて、体が溶けてしまいそうだった。

「ファーストキス……大翔くんになっちゃった」

「俺もだよ……。美羽、好きだ」

「私も負けないくらい……。好き」

お互いに顔を赤らめたまま、視聴覚教室を後にした。

結局、「最人気賞」は、取れなかった。だが俺にはそんなことはどうでも良かった。

「キス、してしまったなあ……」

生まれて初めてキスをした。まだ唇に感触が残っている。美羽の柔らかくて甘い唇。家に帰ってもまだ興奮していて、今日は一睡もしていないのになかなか寝付けなかった。

気持ちの向かう先

SIDE：夢

「私の夢はね、保育士になることなの」

「すげーな」。俺なんか夢すら持つてないよ……」

「でもね、保育士になるの、大変なんだ。ピアノも習わないといけないし、勉強もたくさんしなくちゃいけない。でも、小さい子が好きだから、頑張ろうって思うんだ」

「そうだな。今の時代、保育士になるのだって大変だよな。なつてからだって、俺なんかが想像するよりもずっと大変だろう。でも、本当に辛い時は、やっぱり支えがいるよ。俺だってずっと辛い時はお前に支えてもらった。これから辛いことがあったら、俺でよければ、支えになつてやるからさ」

「……そう言つてもらえて、とても嬉しい……。ありがとう……」

「俺の方がお礼を言いたいくらいさ。いつもは恥ずかしくて言えないけど、今までありがとう。これからもよろしくな」

SIDE：大翔

文化祭の次の日、美羽と遊園地へ行った。初めて見た美羽の私服姿は新鮮で、本当に可愛かった。その日は文化祭の疲れなど知らないくらい、一日中遊び回った。その次の日も、文化祭の振替で学校が休みだったので、ウィンドウショッピングをした。ずっと美羽といても全然飽きなくて。美羽と歩くのは嬉しくて。顔を見るとドキツとして。何の話をして面白くて。美羽との時間を過ごせば過ごすほど、美羽の良さを知ることができた。

「美羽の夢ってさ、何なの？」

「夢……っていうか、何の職業につきたいかってこと？ 私はねえ……。笑わない？」

「笑わないって。約束する」

「ホントに？ ……私、獣医さんになりたいんだあ。動物が大好きなの。傷ついた動物達を、治してあげたい！！」

「スゲー……。俺なんか全然決まってるのに。いいな、夢があつてさ。叶えてくれよ」

「うん……。獣医さんにはホントになりたいけど……。でも、大翔くんのお嫁さんになるんだつたら、夢も……。捨てていいかな……。なんて」

「お、おいおい！ 嬉しいけどさあ……。冗談だろ？」

「結構マジなんですけど？」

他愛のない会話。美羽とのやりとり全てが、美しい。俺の初めての彼女、その人は、クラスはもちろん学年でも一番の人気者の美羽。学校に行けば美羽と会える。放課後は暗くなるまで美羽とおしゃべり。夜は遅くまで美羽とメール。そう、俺は端から見れば誰もが羨む、最高の生活を送っている。女の子と付き合つことがこんなに楽しいなんて。今は、今まで生きてきた中で、一番充実しているかもしれない。

それでも、望むものはやっぱりあるわけで。美羽と喋る。手をつなぐ。キスをする。俺は、その次を望むようになった。男なら誰でも夢見るものを。それを、あんな可愛い彼女と……。想像するだけでも楽しめそうだ。でも、告白されたあの日、美羽はエッチを目的で付き合うのは嫌、みたいに言つてたっけ。したい、なんて言つたら、拒絶されるだろうか。でも俺のことを本当に好いてくれてるし好きな相手となら、やっぱりしたいよ。美羽と付き合つてから一週間が経った。美羽の家に行ったことはないし、俺の家に誘つたこともない。付き合つて一週間でエッチなんて早いよな、と思いながらも、積極的にいってみよう、とも思った。

放課後薬局で、ある物を探す。それは三時間前、まえおつちこんな会話があつたからだ。

「……フジ、お前……。もしかして、もうやったとか？」

「いや、まだだつて。まだ一週間だし……」

「でも好き同士だつたら早くてもおかしくないだろ。いいなあ、美羽さまを犯すの？ お前が？ ふざけんな……！」

「お前も早く彼女見つけれつて」

「ああー、お前一人童貞卒業か！？ くっそー！」

「まあまあ……」

「でもお前、ちゃんとアレ買つとけよ」

「あ、そうか。忘れてた」

「おいおい、必需品だろ？」

そして、今に至る。だがそれが薬局の中の、どこにあるのか分からない。まじまじと片っ端から商品を見ていくのも気が引けるので、ウロウロしながらさりげなく視線を凝らす。

「あ、あつた……」

それは店の端っこの方にぽつんと置いてあつた。これだと思落としてもおかしくないな。ようやく見つけたが、これだけを買うのはばつが悪いので、制汗剤や頭髪剤と一緒に買う。何故かそれを買う時は後ろめたい気分になつてしまふ。店員がニヤニヤしているのではないか、と疑う始末。

「ありがとうございました」

やけに値が張るそれを購入して俺は、早く活用する日が来ると良いな、と思つた。

特に変わらない一週間で美羽と過ごす。俺は美羽と話している間隙があればそういう話に持っていこうと、頭がいっぱいだつた。自分から切り出すのは怖いし、かといって付け入るような話題は出るはずもなく。そんなこんなで、文化祭の日からちょうど二週間になる今日を迎える。今日も、美羽とデート。ウィンドウショッピングだ。市内に大きなショッピングモールがオープンしたので、そこに行くことになった。

電車で市内まで行く。電車の中はそこまで混んでなく、座る席は十分にあつた。市内までは三十分程度かかる。

「ねえ、大翔くん？ …… 悪いんだけど、肩借りていいかな……？ 昨日あんまり寝てなくて……」

「い、いいいいいよ！」

「そんなに興奮しなくてもー！！ でもありがと。じゃあ、遠慮なく……」

そう言つて、美羽は俺の肩にもたれかかる。肩に美羽の熱を感じる。温かい。柔らかい。早く美羽としたい…… その気持ちがまた高まってしまった。

「見て見て！ もうクリスマスツリーが用意してあるよ！」

「そうかー、もうすぐクリスマスかあ……」

クリスマスまであともう少し。でも俺の頭の中は、美羽とやりたい気持ちでいっぱい、クリスマスなんてどうでもよかった。今日、初体験をするんだ。もう覚悟は決めた。

「……そろそろ出よつか？」

「そうだな。もう十分楽しんだよな」

色々商品を眺めて長い時間楽しんだ俺達は、ショッピングモールを後にする。ついにチャンスが来た。誘うなら今しかない。

「これからどうする？ もう五時だから帰っても良いけど、もうちょつと一緒に居たいよねえ」

「あ、あのさ！ 俺の家に来ない？」

「大翔くんち？」

「そ、そう。今日はさ、妹が吹奏楽部で夜にコンサートをするんだ、だから父さんも母さんも家にいないから」

ここまで言えば、さすがの美羽もわかってくれるだろう。

「……………うん、いいよ」

ダメ元だったので、俺は少し驚いた。良かった、救われた。だがこれからが肝心。俺がしっかりリードしないと。

「……ホントにいいんだよね？」

家に着いてから、すぐに俺の部屋へ案内をした。部屋きれいにしているね、などと会話を少し交わす。だがすぐに、無音の間が続くお互い緊張しているのが分かった。そして焦る俺は、そう聞いてみたのだった。

「うん、大翔くんとなら私………いいよ」

改めて、了承を得る。家にまで呼んで拒絶されたらどうしようかと思った。心臓がバクバクしてくる。……美羽と。これから起こる出来事を想像して俺は、自分を保ってなどいらなかった。

「それじゃ、大翔くん………バイバイ」

「ああ、バイバイ」

お別れのキスをする。お互いに照れていて、目を合わせられないそう、つい先程まで一つになっていたことを思い出してしまうから。かつてこれほどの快楽があっただろうか。何度しても飽きないだろう、と思ってしまう。処女の美羽はものすごく痛がっていたし、俺も経験がないのでぎこちないものだったが、美羽と一つになった、それだけで俺のモノは絶頂に達した。言葉では言い表せないくらい、友達全員にやったよ、と自慢したいくらい、俺は気分が良かった。

SIDE：美羽

……大翔くんと、してしまった。初体験。想像以上に痛かった。今でも痛い。大翔くんは気持ち良さそうだったけど、私は痛いだけで気持ち良くはなかった。でも、大翔くんと一つになれた。とってもとっても嬉しい。……エッチなんて嫌だったけど、大翔くんがしたいって言うんなら、またしてもいい。本当に本当に好きなんだから！大翔くんに私の裸見られるのも恥ずかしかったけど……。でも、良い気分だなあ。恋することがこんなに楽しいなんて。私の彼氏の藤城大翔くん。大好きだよ！

SIDE：大翔

美羽と別れて二時間は経つというのに、疲れが取れない。終えた後がこんなにキツイなんてな。今日は早めに寝ようと思い、布団に入ってまぶたを閉じる。

SIDE：夢

「ずっと好きでした！！ 付き合って、下さい！！！」

SIDE：大翔

朝、ガバツと飛び起きる。変な夢を見た。胸がドキドキしている。どうしたんだろう、陽菜に告白された夢を見た。そういえば最近毎日夢を見ている。それに、毎回夢に陽菜が出てきていた気がする。陽菜からの告白。なにか、心の中にもやもやしたものがあつた。何か忘れているというか……もどかしくて、嫌な気分だった。

「おはよー」

「……お、おつす……」

教室に入り、陽菜に挨拶をされる。別にいつもの事だが、今日はあんな夢を見たので、ついつい意識をしてしまう。

「あの、大翔くん。今日の放課後……空いてる？」

「きよ、今日の放課後……？ ええと……」

今日は塾があり、美羽とデートはしないから、少しくらいなら時間大丈夫だろう。

「い、いいよ。部活は大丈夫？」

「うん、今日は珍しく休みなの。……それじゃあ放課後、教室で待っててね」

「わかった」

陽菜からのお誘い。もしかしてあの夢が正夢で、本当に告白をされるのだろうか。でもごめん陽菜。俺には美羽という素敵な彼女が

いてな。この際だから、陽菜にも言っておこうと思った。

まだ少し胸がドキドキしている。あの夢のせいだ。授業中も、気を抜くと右斜め前の陽菜の方ばかり見つめている。休憩時間も、美羽やまえおっちとカズヤンと話をするが、やはりどこかで陽菜のことを考えてしまう。陽菜とは家が近い同年代ということで、よく遊んだ。兄妹、とまではいかないが、本当に親しい関係だった。陽菜がいるのが当たり前だったので、意識をしたことはなかったが、陽菜は可愛い。内気な性格が邪魔するだけで、彼氏の一人や二人いてもおかしくないと思う。でも陽菜に彼氏……あまり想像がつかないな。彼氏がいたら、と思うと少しそわそわする。いや、俺にも素敵な彼女がいるのだから、陽菜にも素敵な彼氏を見つけて欲しい……そう思った。

「……あの、竹内さん。本当に悪いんですけど、さっきの授業のプリント貸して貰えませんか？」

「いいよ。どうしたの？」

「ぐっすり眠っちゃってさあ。どうも現国は眠くてしょうがないんだよね」

「そうだよー。はい、これプリント」

「ありがとー！ 本当にすいませんー！」

陽菜が山下にプリントを貸す。陽菜は優しい。それ故にこういったことはよくある。宿題を見せてくれたとか、物を貸してくれたとか。クラスに一人こういう真面目で良い奴がいれば、かなり便利だ。悪い言い方をすれば、「困った時に使える道具」に出来るから。だが陽菜の場合はそこまで思われてはいない。自分から進んで輪に入るからこそしないものの、人付き合いは悪くないし、何よりも人が良い。皆それを知っているから、いたずらに貸してとは言わない。本当に困った時だけ陽菜に頼る。山下だってそこらへんのことはよく分かっているだろう。……まあそれでも結局陽菜は損をしている

のだが、陽菜にとって優しさは永遠のテーマらしく、以前、
「お前、人に優しくしすぎだよ。色々損してるぞ？」

と言ってみたところ、

「やっぱり、人に優しくされたら嬉しいし。だから私も、少しでも人に優しくしたいなって思ってるの」

なんてすごい言葉が返ってきた覚えがある。陽菜は天使のように優しい。俺も、その優しさに昔から甘えていた気がする。

「どうしたの？」

美羽にそう言われて、我に返る。美羽との会話中だったにも関わらず、陽菜のことを見つめていた俺。隣にいるこんな可愛い彼女に、何の不満があるというのだろうか。

「美羽、好き」

「きゅ、急にそんなこと……。私も好きだから」

お互いに目をつむり、キス……。といきたいところだったが、教室の中なのでそれはやめておいた。美羽は可愛い。それに積極的になりドをしてくれるから、すごく楽に付き合える。そんな美羽が、俺は好きだ。でも、文化祭の頃よりはほんの少しだけ、気持ちが薄れているような気もした。

放課後。教室はまだ掃除中だった。教室の掃除当番は、陽菜の班だ。なので、終わるまで待つ。

「あれ、今日は美羽さまと一緒にじゃねーの？」

「ああ、今日は俺、塾だから」

「そっか。楽しくやってるみたいだなあ。いいなあ。大事にしるよ？」

「そんなの、百も承知だって」

陽菜と同じ班のまえおつちと会話をする。だが、俺と少し話をしていただけなのに、

「前岡くん！ちゃんと掃除しようよ」

と女子に言われる。所詮、まえおつちと少しでも何か話したい

から注意しているだけなのだろう。男の俺から見てもカッコイイと思えるまえおっち。ワックスベタベタな髪も似合ってますよ。

石崎先生からのOKが出て、教室の掃除が終わる。陽菜の班の人が教室を出るまで待つ。最後に教室を出たまえおっちと別れの挨拶をした後、陽菜に向き直る。

「どしたの、陽菜？」

「大したことじゃないんだけど。CDショップに付き合ってほしいの」

「CDショップ？ いいよ別に」

興高を出て、家までの帰り道の途中にあるCDショップへ寄る。てつきり告白かと思っただけ緊張気味だった俺は、少し拍子抜けした。そりゃ、告白なんてあるわけないよな。でもCDか。そういえば陽菜って音楽とか結構聴いてたよな。どっちかというとロックよりもバラード好きな俺とも、よく話が合っていたし。

「大翔くんがよく聴いてるって言ってたアーティストなんだけど」

「ああ、あれね。最近かなり売れ出してきたよな」

「うん、それでクラスでもよく話題になるから、聴いておこうって思っただけ」

陽菜も、皆の話題についていこうと頑張っているんだな。だがこんなことはほんの一部でしかない。陽菜は色々なことを陰でもすごい努力をしているに違いない。本当に関心する。

「今ヒットしてる曲が入っているやつは、このアルバムだな。こっちの方もオススメ」

アルバムを二つ推薦する。このアーティストは基本的にバラードだから、陽菜でも大丈夫だろう。陽菜は俺の勧め通り、そのアルバムを買う。

「ありがとう。ごめんね、無理言って」

「いやいや、陽菜とのデート、楽しかったよ」

「で、デートなんて……」

「まあそう照れるなつて。そういえばな、陽菜。俺さ、美羽……吉村と付き合ってるんだ」

「えー？ 吉村さんと……！？」

驚いた表情をする陽菜。学年のアイドルである美羽と、何のとりえもない俺が付き合っていると云うのだから、驚くのも当然なのかもしれない。

「そ……そう、なんだ……」

落胆気味の返事をする陽菜。

「吉村から好きって言われてさ。文化祭の日からなんだけどね」

「……そうだよな……吉村さん、すごい可愛いもんね……」

「俺に先を越されたのが悔しい？ まあ陽菜も、良い彼氏見つけるつて。お前に合う人、絶対いるからさ」

「う……うん………」

家に帰るまで陽菜はどこか俯き加減だった。家の前で別れる時、ふと陽菜の顔を見た。その時にかすかに見えた頬を伝っていた涙が、とても気になった。

翌日、目覚めは良かった。毎日見ていた夢も見なかった。ただ、起きてすぐに陽菜の顔が浮かんた。陽菜のことがどうにも気にかか。学校に行っても、ぼんやりと陽菜の顔を見ながら授業を聞く。陽菜は、何で泣いていたんだろうか。何か、ショックなこともあったのか？ 陽菜のことばかりを考える。放課後、美羽とのデートも少し上の空で。美羽に申し訳ないな、と思った。

次の日。授業を終え、掃除も終わった時に、カズヤンが走ってやってきた。

「おいフジフジ！ 大ニュース！！ さっき聞いたんだけどさあ。三組に高森っているじゃん？ あのちょっと調子に乗ってる奴。あいつがさあ、なんと昨日竹内に告ったらしいよ！！」

「え……ホントか!？」

カズヤンの話を聞かやいなや、俺は我も忘れて走り出していた。
竹内……陽菜を探す。今日は部活の日のはず。部室に行く途中か？

……いた!!

「おい、陽菜!!」

「え、大翔くん？ どうしたの？」

「お前、高森に告られたって、ホントか??」

「え……？ そ、そうだけど……」

やっぱり本当だったのか。焦る俺はすぐに問う。

「それで……それで、OKしたのか!？」

「う、ううん、してないけど……」

「……そっか……」

はぁ、良かった。安心した。陽菜が告られるなんて、ビックリした。

「ど、どうしたの……?」

「え………? いや、別に……」

そうだ……俺はどうしたのだろう。陽菜が誰と付き合いおうと、全然関係ないはずじゃないか。むしろ、応援するべきなのに。何をほつとしているんだ？ 我も忘れて、走ってここまで来て、こんなことを聞いて。少し、熱を冷ました方がいいかな。そうだ、ここ最近の俺はどうかしていた。

「ごめん……なんか自分でもよくわからないや……。ごめん。じゃあ部活、頑張つてな」

「……う、うん、ありがとう」

陽菜と別れて、校門へと向かう。

「おーい、大翔くん!」

「美羽……」

「今帰り？ 今日塾だったよねえ。サボって、買い物に付き合ってくれない??」

陽菜には陽菜の人生があり、俺には俺の人生がある。そして俺に

は今、こんな可愛い彼女がいる。美羽は俺の彼女でいてくれる。

「いいよ。朝まで付き合うぜ！」

今まで下がり気味だった分、今日は無理にでもテンションを上げよう。目の前の、美羽を大事にしよう。俺はそう思……………えなかった。

「大翔くん…………無理してるの？」

「えー？　なんで？　無理なんて、してないよ」

「そ、そう？　なら良いんだけど…………。なんか無理にテンションを上げてるっていうかさ…………」

「そ、そうかな…………」

「疲れてるんじゃない？　ホントごめんね、付き合わせちゃって。無理だけは絶対しないでね？」

「ああ…………大丈夫だって！」

…………顔に出ているのだろうか。考えていることは確かに、陽菜のことだ。美羽を通して、俺は陽菜を見ている。ふと気がつくと、美羽と陽菜の比較までしていた。ロングヘアの美羽、ショートヘアの陽菜。積極的にガンガンリードをする美羽、内気であり喋らない陽菜。俺は美羽と付き合っている。美羽の彼氏だ。美羽だって、俺のことを本当に好きでいてくれている。それなのに、俺は…………。

美羽への気持ちと陽菜への気持ちが入り混じって俺を混乱させる。美羽より陽菜が好きだっていうのか？　そりゃあ陽菜は幼い頃から付き合いだから、美羽のことよりもよく知っている。でもこんなに俺のことを好きでいてくれる、こんなに可愛くて優しい美羽よりも、陽菜のことが気になるのか？　わからない。何度も自問自答をする。

「今日はホントに帰った方がいって！　表面ではテンション高いくせにすごい沈んでるよ？　またデート、誘うからさっ！」

「ああ…………わりい…………」

今日はどうも気分が悪い。こんな気分では美羽に迷惑をかけると

思ったので、今日は遠慮なく帰ることにした。

SIDE：美羽

大翔くん、どうしたのかなあ……。何かを考えている感じだったけど、なんか嫌なことでもあったのかな。大翔くんが落ち込んでると、私まで落ち込んでくるよ……。大翔くん、早く機嫌治して楽しく過ごそうね！……………あ、もしかして、あれが原因なのかな……。大翔くんも、さすがに二回目をせがむのは恥ずかしいと思うし、私から言った方がいいのかも。痛いけど、大翔くんとの愛の証だし……。は、恥ずかしいよう。そっか、大翔くんそれで不機嫌だったのかあ。ごめんね、気がつかなくて。私が、元気づけてあげないと……。そうだ、クリスマスにしよう。大翔くん、喜んでくれるかなあ。くれるよね？ 私の初めての人。初恋が実って、本当に良かった。神様、感謝しています。

SIDE：大翔

それから俺は、陽菜のことしか考えていなかった。陽菜をずっと見つめていたかった。陽菜の行動一つ一つを見逃したくなかった。陽菜のことが気になる。これは紛れもなく恋なのだろう。美羽がいるってわかっていながら、心の底では陽菜のことを想ってしまう。

最近では全然見なくなった夢。今思うと、毎日見ていたあの夢は、やはり昔の陽菜とのやりとりだった。俺は昔から、何度も何度も陽菜に支えられて、救われてきたんだ。どうして忘れていたのだろう。陽菜がいたから俺は、ここまで来れたんだ。幼馴染だから、身近にいたから、自分の「好き」という気持ちがわからなかった。俺は本当に情けない奴だ。

陽菜には、これからも恩返しをたくさんしなければならぬ。いや、その前に俺の気持ちに整理をつけないといけない。もう俺の気持ちは決まりつつあった。美羽と陽菜。やっぱり、陽菜が好きだ。ただ、陽菜は俺のことを好きなのだろうか。それだけが気にかかる。

「大翔くん、あのアルバム、良い曲ばかりだったよ！ 本当にありがと〜」

「いやいや、気にするなっ」

陽菜とのささいな会話さえも嬉しい。今までこんなことを思ったことがあっただろうか。陽菜がいて当たり前前の人生だと思っていたはずだ。俺は、何を勘違いしていたのだろう。陽菜がいてこそその人生ではないか。陽菜が好き——そう思う時は、後ろめたいながらも心地良い気分だった。

九ヶ月越しの想い

「大翔くん、もうすぐ冬休み！ いっぱい遊ぼうね」。とりあえず雪だるまは作りたいよねえ。あ、初詣も行こうね！ それとそれと……」

美羽と一緒にいる時間は、本当に苦痛だった。美羽が話しかけてくるとドキッとしてしまう。それも、美羽に一筋だったあの頃のドキッとは違う。後ろめたさからくるものだ。美羽の言葉一つ一つが俺を締め付ける。でもふと見る美羽の姿は、やっぱり可愛くて……。「どしたの、見つめたりして。また私の魅力に気づいた？？」

「はは、自分で言うなって」

美羽といると、陽菜が好きだという気持ちが鈍ってしまう。例えば美羽と別れたとしても、陽菜はOKをしてくれるだろうか。もしフられるんなら、美羽とこのまま関係が続ける方が良いんじゃないだろうか。そう思ってしまう。美羽と、陽菜。頭の中で二人のことが駆け巡る。考えるのをやめたい。誰か、俺に納得出来る答えをくれ。

「それじゃ、また明日ね！」

「おう。またね」

美羽と別れる。明日は終業式だ。このままいくと、美羽と過ごす冬休みが待っている。冬休みになると陽菜と会う機会もないだろう。俺はどうしたいんだろう。どっちといたいんだろう。美羽の良さだつて、陽菜の良さだつて知っている。……両方とも、欲しいんだよ。そんな、理不尽なことを考える。

陽菜は……。陽菜は俺のことを、どう思っているんだろうか。俺は陽菜にとつての何なんだ？ ただの幼馴染か？ 恋愛対象にはないのか？

じゃあ、美羽は……。美羽は、俺となら結婚しても良い、とまで言ってくれた。そして俺の初めての相手だ。まだ、一回しかしてな

いけど。わがままを言えば、美羽とたくさんやりたい。想いが尽きるまで、あるいは死ぬまで美羽を好きだと言っても良い。あんなに可愛いんだから、あんなに優しいんだから。美羽を放したくない。誰にも美羽を取られたくない。俺だけのものでいて欲しい。

こんなにも美羽のことが好きなのに、何故か陽菜の顔が浮かんできて。ちよつとドジで、ものすごく優しく、陰で努力をして、俺を何度も何度も支えてくれて。幼馴染だからって、頼りすぎていた。そして距離が近すぎて、陽菜の魅力に全然気づかなかった。陽菜をもっと知りたい。陽菜ともっと話をしたい。色んな陽菜を見たい。陽菜……陽菜！俺は、どうしたらいい……？

……どうして机の引き出しを開けようと思ったのかはわからない。別に補充する文具があるわけでもないのに。ただ、なんとなく引き出しの中の何かに呼ばれた気がした。特に考えもなく、俺は机の引き出しをそつと開けてみた。

「ん……これは……？」

机の引き出しの中には、小さなお守りが入っていた。

「これは……受検前に陽菜がくれたお守り……」

ふと俺は、過去のことを思い出した。

過去 SIDE：お守り

「ふう、やっと出来た……。このお守り、大翔くん、喜んでくれるかな……」

陽菜はそう言って、完成したお守りを眺める。

「裁縫はあんまり得意じゃないんだけど、今回は上手に出来たあ……よし、勉強も頑張らないと！」

陽菜はそう言って机に向かう。数学の参考書を片手に、難しい問題をドンドン解いていく。

「絶対、大翔くんと合格したいな！合格したら、気持ちを伝えるの！」

「おはよう、大翔くん」

「おはよっす」

陽菜は大翔に挨拶をし、ポケットからお守りを出す。

「これ……お守り。作ってみたの。大翔くん、頑張ろうね！」

「うわー！ 嬉しいよ……。ありがとう。絶対受かってやるからな」
大翔はお守りを大事そうにポケットに入れる。

——その日の夜。

「陽菜、お守り作ってくれたんだ……。すげえ手が込んでるし……。よし、頑張るか。もう受検まで一ヶ月もないからな」

大翔は休憩をほとんど挟まず、明け方の四時まで勉強をした。

大翔はそれから毎日勉強を頑張った。一日の中で、勉強以外のことをすることはほとんどないくらい。焦りも余裕も感じられる。そんなこんなで、受検までの時を過ごす。

「ふう。いよいよ今日、受検だな。やれるだけのことはやった。どんな問題が出てきてもいけそうな気がする」

大翔はそう言って、鞆に筆箱や最終チェック用の小冊子等を詰め込む。

「それじゃあ陽菜のお守り、しっかり見守ってくれよ」

大翔はお守りを制服のポケットに入れ、家を出る。

——興高へ行く途中、大翔は電車で誰のるか受検票を拾い、偶然同じ会場だったその子に渡した。

「おっす、陽菜。頑張ろうぜ！」

「うん！ 頑張ろうね！」

教室で陽菜と会う。周りは、もうほとんどの生徒が席に着き、一

点でも逃せない、と最後のあがきをしている。

「それじゃあ、どうぞ」

試験監督の先生の合図で、皆一斉にプリントを表にする。一日目の試験、開始。

「どうだった……？」

「微妙だったかな。明日頑張らないとちょっとヤバイかも」

「そっか……」

「陽菜は？ 余裕？」

「そうでもないよ。私も明日次第かな」

「よし、じゃあ明日で終わりだ、頑張ろうな！！」

「うん、がんばるぞー！」

家に帰るなり、大翔はすぐに机に向かう。

「くそ……ケアレミスが多かった……。明日頑張らないと、本気でヤバイな……。くそ……。頑張らないと……。頑張らないと……！」

「では始めてください」

二日目の試験が始まった。教室にはカリカリ、という筆記の音が響く。緊迫したムード。大翔もいつも以上に集中している。問題を解くスピードもいつもより速い。

「それでは、筆記用具を置いてください」

試験監督のその言葉で、興賀高校の入試は終了した。

「……どう、だった……？」

「一応手ごたえはあったな。陽菜は？」

「私も不安だけど、多分大丈夫だと思う……」

「ああ、受かってるといいなあ……」

入試は卒業式の翌日からだったので、入試が終わってからもう着る事もなかった制服をもう一度着る。今日は、興高の合格発表日。ポケットにはあの日以来取り出していないお守りが入っている。

「おはよう、大翔くん。ドキドキするね……」

「ああ……。ホントに」

大翔は陽菜と電車で興高まで行く。

「うわー……不安でいっぱいだよ……。この電車に乗ってる人たち、みんな興高なのかな……」

「どうかね……」

「あ、着いたよ。大翔くん、一緒に見ようね」

「おう！」

興賀高校の校門。掲示板に合格者の受検番号が書かれた紙が張り出されている。その前には、受検した生徒でこった返し。

「2292……2292……」

陽菜が数字を口に出しながら番号を探す。

……2291 2292 2294 2296 2297 22

98……

「……そんな……」

「あつた！！私のあつたよ！！！ほら、大翔くんのも！私たち同じ中学だから、大翔くんの受検番号、私の前だよ！ほら！
！大翔くんもあるよ！！」

「陽菜……？」

「あ、あの……入学手続き、今行っても混んでるでしょ……？だから……ちよつとこっちに来て……」

「おい、陽菜……」

陽菜は大翔の手を取り、人気のない場所に連れて行く。

「無理言つてごめん。でもこれだけは、聞いて欲しいの……。勇気出して、言つね。私……大翔くんのこと、好きです！ずっと好

きでした！！ 付き合って、下さい！！！」

陽菜は顔を赤らめて、勇気を精一杯出して、大翔に告白をした。

「陽菜……あのさ……陽菜……」

「あ……い、いきなりごめんね……ごめん……返事は、いつでもいいです……」

「陽菜……ごめん！」

大翔はそう言って、その場から駆け出した。

「大翔くん！？」

大翔はそのまま走り去り、興高を後にする。

—— たけうち、ふじしろ。そう、受検番号は大翔の方が後なのだ。大翔はその場で「2293」と書かれた受検票を破り捨てる。

「そんな……そんな……」

大翔は廃人のように下を向きながらトボトボと歩く。そして中学校へ向かう。担任に報告に行かなければならないから。

「そうか……。でもな、先生の友達に興高の職員がいてな。どうやら、第一選抜で内定をもらった奴が、二人ほど辞退したらしい。だから、第三選抜。もしかしたらまだチャンスがあるかもしれないぞ」「ホントですか！？」

「ああ、お前は妙に公立にこだわっていたよな……。私立も楽しいぞ？ ……でも可能性があるんなら、頑張ってみろ。模試の結果からいくと、興高の進学科、受かるくらいの点数を取っていたじゃないか。最後まで頑張れ！」

「はい、頑張ります！ ありがとうございます！」

それから大翔は、狂ったように勉強をした。元々合格する實力はあった。ただ、緊張と注意不足により、ミスが多かったのだろう。特に二日目は急いでやっていたので、記号問題さえも間違えていた。ケアレスミスも實力のうちだから、落ちたのはしょうがない、と割り切り、第三選抜に向けて必死に勉強をした。

——春になり、桜が咲き始める。

始業式。新クラスの発表もあり、体育館に並ぶ。

「陽菜……俺、合格したんだよ。頑張ったんだ。それも陽菜と同じ、進学科で、見ての通り同じクラスだ。ほら、このお守り、覚えてるか？ これのおかげかもな」

「……大翔くん……あのさ……」

「ほらそこ、始業式始まるから喋るなよー」

石崎先生に注意される。

「それじゃ、またよろしくな！」

「あ………うん………」

「第三選抜の合格枠は二人、受検者は十六人。倍率はざっと八倍つてところか。ホントに合格出来たのは、このお守りのおかげかもな。ありがとな、陽菜。ありがとな、お守り」

そう言いながら、大翔はお守りを大切に机の引き出しに収めた。

SIDE：大翔

「……………」

あの時のことを、思い出していた。そうだ、俺は第二選抜で落ちたんだ。そしてその合格発表の日に、俺は陽菜に告白されていたんだ……。でも俺はショックで、告白されたことなんて頭に入っていなかった。陽菜は、俺のことが好きだったのか……。せつかく勇気を出して気持ちを伝えてくれたのに、俺は陽菜の気持ちに返事をしなかったのか？ 第三選抜に夢中で、今の今まで告白されたことすら忘れていたじゃないか。俺は……本当にダメな奴だ。ごめんな、陽菜。ごめん。

陽菜は、幼馴染という壁を越えて、好きだと言ってくれた。でも俺は、陽菜への気持ちがわかっていなかったんだ。本当は好きなくせに、幼馴染だと言い訳して、うじうじ悩んで。この間、陽菜が告

白された時、俺はものすごく嫌な気分になった。それは、陽菜のことが好きだからだったんだ。陽菜は俺にとって、特別な存在なんだ。二人で一緒に支え合ってきた、大切な存在なんだ。もう迷わない。俺は、陽菜のことが好きだ。他の誰よりも、陽菜のことを想っている。ただ、返事を待たせすぎた。もう愛想を尽かして、OKと言ってくれないかもしれない。それでも良いんだ。例えダメだったとしても、何度も何度も気持ちを伝える。陽菜のことを好きでい続けたい。陽菜と付き合えるなら美羽とだって別れられる。陽菜……好きだ！

今日は、終業式。今日から冬休みに入る。そしてすぐにクリスマスイヴ。クラスの皆がそわそわしている。無理もない。宿題が多いことを除けば、クリスマス、お正月と、冬休みは楽しいイベントが満載だから。教室に、冬休みへの期待を寄せるムードが漂う中でただ一人、俺は気持ちが悪くなかった。そう、美羽に別れを言わなければならぬからだ。陽菜への気持ちに気づいたから、もうこれ以上美羽との関係をずるずると引きずってはいけない。陽菜のことを考えながら美羽と付き合うなんて最低だ。キツパリ別れを告げよう、と心の中では思っただが、「別れよう」なんてそう簡単に言い出せるものじゃない。実際、美羽を前にすると言葉が喉から出てこないのだ。

「明日はデートしてえ、次の日は休んで。クリスマスイヴの日に、デート。どう??」

「……………いいよ」

情けない。俺は美羽を傷つけるのが嫌なんだ。これだけ仲良くしてもらった、これだけ多くの思い出をもらった美羽を傷つけるのが……………。いや、違う。俺は、自分が傷つくのが嫌なんだ。自分は綺麗なままでありたいんだ。美羽には、いつまでも良い奴だと思われていたいんだ。あれだけ美羽に好きと言っておいて、それなのに自分も美羽も傷つかないで別れる方法を探している。そんなの、無理

なのに。さらには、美羽を前にして別れの言葉を言えそうにないなんて。クリスマスイヴまでには、言わないと。これからのデートの予定に目を輝かせる美羽を前に、そんなことを考えていた。

クリスマス三日前。今日は、美羽とデートをする日。映画館に行き、ウィンドウショッピングをした後、美羽の希望で景色を見に行くことになった。夕焼けがものすごく綺麗な場所がある、と言っていた。デートの待ち合わせは一時。俺は十五分前には着くようにしているのだ、十二時半に家を出る。自転車で、待ち合わせの場所へ向かう。途中、興高の近くで人がうずくまっているのが見えた。さすがに素通りする気にはなれないので、近くへ寄って声をかけてみる。

「大丈夫ですか？」

「……！？……大翔くん……？」

……陽菜だった。突然の陽菜との出会いに俺はドキッとした。陽菜、こんなところでどうしたんだろう。部活の帰りだよな。そう思っていると、足から血が出ているのが目についた。

「おい、陽菜！ どうしたんだ？ 血が出てるじゃないか」

「う、うん、ちょっとね。車とぶつかっちゃって。大したことないんだけど」

「車とぶつかったのか！？ 大丈夫なのか？ ちょっと見せてみる」

傷はそこまで深くはなかった。少し接触した程度だろう。ただ、出血の量は少くない。

「その車は、どこに行ったんだ？」

「そのまま走り去っちゃった……。謝ろうとしたんだけど」

「轢き逃げか！？ 陽菜は悪くないだろ！ 優しすぎるよ……。それより、病院に行こう。そんな足じゃあ、自転車にも乗れないだろ？ 後ろ乗れよ、俺が連れてってやるから」

「ありがとう……。本当は困っていたから……。お願いしてもいいかな？」

「ああ、遠慮すんな」

陽菜を自転車の後ろに乗せて、病院へ向かう。一番近い病院まで、二十分程度かかる。美羽には悪いが、今は怪我をしている陽菜の方が大事だ。

「……ずっと昔、似たようなことがあったよね。私が骨折して、大翔くんがおぶってくれて。あの時は、すごい嬉しかったんだよ?」

「ああ、覚えてるよ……。陽菜、すごい軽かったんだよね……」

以前夢で見たことがある。陽菜、そんなことまで覚えてくれてるんだな。

「あのさ、陽菜。こんな時に悪いんだけど、クリスマスの日、空いてるかな?」

「え? クリスマス……?? いいけど……」

「ありがとう」

俺は陽菜を病院へ送り、全速力で待ち合わせ場所へ向かう。

「ごめん遅れて!」

「おっそ〜い!! ……って良いよ。大翔くん、遅刻したことないし。何か理由があるんでしょ?」

「あ、ああ……。ごめん」

「いいからいいから! 気にしないって! 言にくい理由だったら聞かないしさ」

「……ありがとう」

……美羽の優しさが、とても痛かった。

「はあ〜……ずっと余韻に浸っていたい〜……」

「ホント……めっちゃ良かったよ。もつとクサくて、乙女チックなものかと思ってた」

「私も〜。心あったまったよお〜」

映画館でラブストーリーを見た後、俺達は余韻に浸りながら、近くのデパートへ行く。とはいってもウィンドウショッピングなので、

買うことはしないが。

「見て見て！ あの指輪。ペアで、すっごく可愛い！！」

「ホントだな。でもはめてたら、恥ずかしいよな」

「思ったー。クリスマスプレゼント、指輪がいいかなーなんて思ったけど、やっぱ変だよな。大翔くんとペアで、はめてみたいけど……」

「……あ、あっちに何かあるぜ！」

「なになに？」

とつさに話題を変える。美羽は、俺との「これから」がまだまだ続くと思つて俺と付き合っているんだ。それなのに、俺はその「これから」を潰すんだ。美羽に別れの言葉を言うのを想像するだけで胸が張り裂けそうだった。逃げられるものなら逃げたい。でもこれは避けては通れない道だから。陽菜のために、陽菜のために俺は……：言えるだろうか。決意しきれない自分の心の弱さを呪いつつ、美羽との残り少ない楽しいやりとりを交わす。

「ここなんだ」。ちっちゃい頃お父さんに連れてきてもらつて、ここで夕焼けを見て。ものすごく綺麗だったの。今でも鮮明に覚えている。ここの夕焼けを見ると、なんだか自分がちっぽけに思えちゃうんだ。楽しみにしてていいよ」

美羽に連れられて、俺は山の頂上へ来ていた。山といっても小さいもので、十分程度で山頂にたどり着くことが出来た。まだ時間は少し早く、日が沈んでいない。夕日が見えるまで、もう三十分といったところだろうか。

「私ね、実は……お父さん、いないんだ。私が小さい頃、病気で……。元々体も弱かつたし。私、お父さんっ子だったから、死んじやった時はそりゃあもう一日中泣いてたんだー」

父親、いないのか……。知らなかった。今まで一度もそんな話は聞いたことがなかった。

「だからここは、お父さんとの思い出の場所。お父さんに教えても

らった素敵な場所。でも実はお父さんにここを教えてもらってから、一度も来てないの。次にここへ来る時には、大切な人と一緒に……って決めてたんだ」

美羽の言葉に、胸が締め付けられる。美羽にここまで想ってもらっているのに、俺はどうして今、心が痛いのだろうか。

「私さ……女子の中でも、ベラベラ喋る方で、なんというか、ムードメーカーじゃん？ 悩

みなんてなさそうとか、強いよねとか、よく言われるんだけど、大翔くんもそう思う？」

「ああ……。確かに悩んでることはなさそうだし、美羽は強いんだろなって思うよ」

「うん……。でもね、やっぱり人は、見た目じゃあ判断出来ないんだよね。私、全然強くないんだよ……。今でも時々、お父さんのことを思い出して泣くことがあるんだ。皆にはお父さんがいるって思ったら、悲しくて。どうして自分には今お父さんがいないんだろうって。友達も皆、お父さんなんかウザイって言うけどね。私は、お父さんと過ごした時間、とても少ないから。ふとした時に、よく涙を流すの」

「そうなんだ……。美羽が泣くのって、なんか想像出来ないな」

「そうかなあ……。でもお父さんのことじゃなくても、私はよく泣くよ。悲しいことや辛いことがあった時は、家でいつも泣いてる。私、本当は全然強くないの……」

「そう、なんだ……」

「見た目では悩みなんでなさそうな女の子だけど……。ホントは、泣き虫な女の子なんだよ？ ……それでも、最近はちっとも泣かなくなっただよ？ ……大翔くんがいてくれるから」

美羽は、俺のことを好きだと、再確認させてくれる。

「大翔くんには、本当に感謝してる。受検票を拾ってくれたから、だけじゃないんだ。そりゃあ、きっかけはそれかもしれないけど。受検票がなかったら大翔くんに出会うことがなかったかもしれない

けど。大翔くんは、本当に優しいから。本当に良い人だから。大翔くんと出会えて、本当に良かった……。私、すごく幸せ……」

こんなことを言われては、とてもじゃないが別れ話なんて切り出せない。ごめん、美羽、ごめん。心の中で何度も呟く。言い出せないのは分かっているのに、言おう、言おうと焦る俺の目の前には……綺麗な夕焼け空が広がっていた。

「見て見て！　これが、私の言ってた景色だよ。すごいでしょ？」
キレイ……」

夕日がくつきりと見えて、真っ赤な空が目映る。ぼんやりとほどよく光るオレンジ色は、今まで見てきたどんな景色よりも綺麗だった。心打たれるとはこのことだろうか。もし俺が画家だったなら、この目の前の風景を絵に写したいと思っていただろう。

「すげえ……。夕方って、なんとなくテンション下がるけど……。夕日が、こんなに綺麗だなんて……」

「この場所だから、こんなに綺麗に見えるんだよ？　とっておきの場所なんだから。ほら、こんな夕日を前にすると、自分は小さいんだな、まだまだだなーって思えてこない？」

「……ホントだな」

この美しい景色を前に、俺もその言葉に納得した。今、こんな綺麗な夕日を見ているカップルもいれば、一人寂しい夜を過ごす人だっている。たった今赤ちゃんが生まれたかと思えば、入れ違いにお年寄りが亡くなる。世界は周っている。一人一人の時間で。俺は俺の思ったようにすれば良い、俺は俺の人生を生きたら良い。そんなことを思う。美羽と別れて陽菜と付き合う。俺がそうしたいから、そうするんだ。そんな人生も良いだろう。でも今日は、やっぱり別れを告げるのはやめよう。こんな綺麗な夕日の前で、悲しいことなんて言いたくない。

「ロマンチックだね……キス、しょ？」
「……………ああ」

唇をそっと合わせる。キスなんてもう何度もしてきたが、今日の

キスはとても切なかった。

「……………帰ろっか？」

「ああ、そうだな。ありがと。すごい、良かったよ」

「いえいえ、どういたしまして！」

日曜日。明日はクリスマスイヴで、美羽とデートをする日。美羽との、最後の日になる。俺はこの一日で決意を固めた。だが俺は、いざ別れ話を言うとなった時に心を保てるだろうか……。ちっとも自信がない。それでも、陽菜へ気持ちを伝えたいから。そのために、美羽と……………別れるんだ。辛い。辛いさ。避けれるなら避けて通りたいさ……。自分で勝手に苦しめてるだけだけど……………本当に、辛い。

今の俺の立場、何かに似ているなと思ったら、あの一年二組の映画と、気味が悪いくらいそっくりなんだ。俺は映画を見た後、ユウトは情けない、って思ってたかったわけ？　じゃあ、今の俺はどうだ？　十分情けないじゃないか。情けないとか悲しいとか辛いとか、その立場になってみるまでわからないんだ。まだまだ未熟だな、俺は。

美羽と別れる、そのことはカズヤン、そしてまえおちに伝えた方が良さな、と思った。特にまえおちは、美羽のこと好きだったわけだし。まえおち、怒るかな……………勝手すぎるって。美羽との別れの前に、もう一つ大きな山を越えなければならぬ。

まずはカズヤンにメールをする。

「カズヤン。実は美羽と別れることにしたんだ。他に好きな人が出来たから」

送信。カズヤン、アイドルの美羽をフる俺を、わがままだと思うだろうか。最低な奴だと思っただろうか。少して、返事が来る。

「お前、強いな……………。あんなに可愛くて、しかも一度やった女と別れられるなんて。あ、まえおちにも言えよ？　お前のこと心配し

てたからさ」

俺はメールを読んだ後、すぐに返事を打つ。

「わかってるよ、ありがとう。あと俺は、全然強くなんかないよ……。こんな俺と仲良くしてくれてありがとう。それじゃ、また休み明けに」

そして、まえおつちにもメールを送る。

「まえおつち。話があるんだけど。実は美羽と別れることにしたんだ。他に好きな人が出来たから。ごめん」

送信完了。ドキドキする。怒って返事が返ってこないのではないかと、気が気でない。しばらくして、着信音が鳴る。

「いちいち謝るなよ！ お前が決めたことだろ？ 誰と付き合っても俺は何も言わねえよ。それとこれだけは言っておくけどな、お前がどんなことをしようとも、俺はお前と付き合い方を変えねえからな。一生お前の友達でいるって決めたからな」

……つつ！！

「ありがとう。もう一回だけ……ごめん。それとありがとう」

まえおつち、ありがとう。こんな心からわかってもらえる親友を持って、俺は幸せ者だ。

カズヤンとまえおつちと。いつしかいるのが当たり前で、仲良くするのが当たり前だと思っていた。俺は、こんなに良い友達を持っているんだ。

人間というものは、今ある日常生活に満足出来ない。常に何か欲望がつきまとう。本当は身近なところに幸せがあることにも気付かず。もっと、色々なものを大切にしよう。一瞬一瞬に幸せを感じよう。そう、思った。

君は君でいて

——クリスマスイヴ。今まで美羽と歩んできた、そしてこれから
も美羽と歩むはずの道を、今日閉ざすんだ。今日は、もう心残りが
ないよう、名残惜しむことがないよう、全力で美羽と楽しもう。

美羽、たくさんの一緒に過ごした時間、本当に楽しかった。美羽
という時は至福の時だった。それでも俺は、美羽に目を向けられな
くなった。全てを捨ててでも一緒にになりたい人が出来てしまった。
だから美羽、今日は最後の思い出を作ろう。今まで本当に本当に……
ありがとう。

SIDE：美羽

ついに待ちに待ったクリスマスイヴだ。生まれて十六年間、自分
の家族としかクリスマスを迎えたことがなかったけど、今年は違う。
素敵な恋人とクリスマスを迎えられる！今日はテーマパークへ行
って、夕方まで楽しんで。それから近くの公園で、ベンチに座っ
ておしゃべりして。夜は、私の家に来てもらって。大翔くんが私の
家に来るの、初なんだよね。それで、今日は家族もいないから……
大翔くんと。恥ずかしいよう。でも、大翔くん喜んでくれるはず
だよ。今日は最高の一日にしよう。思いっきり楽しもう。どうか
私たち二人がいつまでも幸せでいられますように――。

SIDE：大翔

今日は、遅刻をしない。いつもと同じ、十五分前行動。今日はテ
ーマパークへ行くと美羽が言っていた。二週間前にオープンした、
市内から少し歩いた場所にあるテーマパーク。オープンして間もな
いし、今日はクリスマスイヴだから、人ごみがものすごいだろう。
それでも、良いんだ。俺は、美羽と楽しみたいんだ。でもそれは、
どこよりもスリルのあるジェットコースターに乗ることじゃない。

ものすごく巨大な観覧車に乗ることでもない。美羽との、ささいなやりとりで良いんだ。今日はいつも以上に優しくしよう。いつも以上にベツタリしよう。それで良いんだ。今日は、一日中笑っていよう。別れ話をするまで、笑顔を絶やさないでいよう。心の中でよしと気合を入れる。そうしているうちに、美羽がやってきた。

「おはよう！ イエーイクリスマスイヴー！ 他のカップルに負けないんだから！！」

「当たり前じゃん！ それじゃ、おはようのチューを……」

「……もう！ おませさんなんだから……。じゃ、目、つむるよ？」
そう言いながらも、美羽はキスの準備をしてくれる。美羽とキスするのは、あと何度だろう。数え切れないくらいしてきた。でもそれも、もう今日で終わりなんだ。

そつと、お互いの唇を合わせる。美羽の唇は、いつも以上に甘い味がした。美羽に思わず見惚れてしまう俺。今日は美羽も気合が入っているようだ。

「て、照れるね……！ それじゃ、行こう？」

「ああ。早く行かないと混むからな」

そう言っただけ俺は美羽の手を取る。初めての頃は、手をつなぐだけでも興奮していたが、今ではもう美羽の手のひらの感触を確かめる余裕すらある。美羽の少し細く、柔らかい手のひら。寒くてかじかんでいた俺の手のひらも、美羽と手をつなぐと温まった。美羽のぬくもりをいつも以上に感じた。

「うわー、予想通り、ものすごい人だね」

「確かに……。あの名物ジェットコースターなんか、一時間三十分待ちだつてさ」

目に映るのは魅力的なアトラクション……ではなく、歩く隙間もないほどの人の群れだった。それも大半がカップルだ。

「さすがイヴ。カップルがものすごいいるね」

「そうだな。でも美羽、男どもが、美羽のことチラチラ見てるぞ」

彼女がいるのに、美羽に視線をやる男達。それもそうだ、俺の隣にはテレビに出てもおかしくないほどの可愛いフェイスの女の子。誰もが羨んでいるに違いない。改めて優越感を覚える。

「見せしめにキスしようよ！……って私自分で可愛いつて思ってるみたいじゃん！」

「思ってるんだろ？ この偽善者！」

「こんな顔に産んだ両親に言って下さいだ！」

俺達は今日二度目のキスをする。美羽と何度キスしても飽きない。それどころか、キスをすればするほど美羽を手放したくなくて。おっと、今はそんなことは考えないでおこう。後ろ向きな気持ちで美羽と楽しくするなんて出来ない。俺はそんなに強くはないんだから。

「じゃあさ、メリーゴーランド乗ろうよ。あれはカップルで乗るのが少ないもんね」

「いや、家族ぐるみで乗ってるな。結構な家族が待ってるぞ？ コーヒーカップにしよう。今なら空いてる」

五分待ちのコーヒーカップに乗ることにする。

「コーヒーカップって、私酔うんだよねー。前こじやない遊園地に行ったじゃん？ あの時もコーヒーカップに乗ったけど、実は酔ってたんだあ……」

「そうだったのか……。わかった、今回はあんまりハンドルを回さないから。酔いそうになったら言えよ。俺が抱きしめて酔いも忘れさせてやるから」

「もうー！ 今日の大翔くん、なんかえっちだよお！！ さては私の可愛さを再認識したなあ？」

「ほら、やっぱ自分で可愛いつて思ってるじゃん！」

「もう、いじわるー！」

美羽、その長くて綺麗な髪、本当に似合ってるよ。笑った時の笑顔だって。俺が落ち込み気味の時だって、美羽の天使のような笑顔を見せられたら、いつでも元気が湧いた。

「ちょうどいい速さだったっ！ おかげで酔わなかったよ。じゃあ次、次！ あれにしよう？」

空中で円を描いて飛ぶ一人用の飛行機。走行中は風が強くて、美羽の服がひらひらして。見えそうで見えない下着が少し惜しかった。俺の初めての相手、美羽。憧れだった女の子との行為。たった一度しかやっていないけど、とても良い気分だった。美羽には悪いけど、正直、何度もしたい。

「あれ怖そ〜！ 一回転してるよ!？」

ちよつと幼さが残る口調も可愛らしくて。放課後にカラオケ行つた時にはものすごい歌が上手くて、圧倒されたっけ。

「あ！ あつちにIQテストとかあるー！ ねえねえ、やってみようよ!」

常にクラスで上位に入るテストの点。でもそれは家でかなり勉強をしているから。やることはしっかりやる美羽の姿は、本当に眩しかった。

「あ、ジェットコースター少し空いたねえ。並ぼつか？」

今まで何十人にも告白されてきたけど、断つて。それなのに、こんな俺を好きになってくれた。

「乗ったやつ全部楽しかったね！ ……それじゃあラスト、観覧車乗ろー!」

美羽との思い出は、何もかもがまだ新しい。美羽の全てが、心に焼き付いている。

「……………大翔くん、泣いてるの？」

「え…………！？ 泣いてないよ!! 泣いてない!!」

慌てて涙を拭う。涙が流れていたなんて、自分でも気付かなかった。

「ほらあ、見て見て！ 一番てっぺん！ こわいこわい!!」

「ホント高いなあ…………。ほら、頂上記念に、キス…………」

「はい…………」

美羽から唇を押し付けてくる。何度も重ねた、俺と美羽の唇。ち

よつと言い争った時だって、仲直りにキスをした。ふと美羽に見惚れた時だってキスをした。一日遊んで、別れる時はいつだってキスをして別れた。綺麗な夕日をバックに映画のワンシーンのようなキスだってした。いつしかキスは、美羽と俺の想いを確かめ合う行為になっていた。

「観覧車が下りてゆく。テーマパークとも、さよならだね」

「そうだな。これから、どうする？」

「……近くに公園があるんだけど、そのベンチでお喋りでもしないなーって。だってほら、今日は雪が降るんだよ？ ホワイトクリスマスイヴっす！」

「そっか。わかった」

……その時に、言おう。美羽、今日は楽しかった。本当に楽しかった。ありがとう。美羽と過ごした楽しい日々は、かけがえのない思い出だ。美羽との思い出全て、俺は絶対に忘れないから……。

美羽に連れられて、公園へ向かう。もうすっかり暗くなっていて、辺りは街灯の明かりしかない。二人で座れるベンチを探す。イヴの夜なのでカップルが多いかと思っていたが、それでもなかった。空いているベンチはすぐに見つかった。

「あ、ここにしよう。ほら、隣、どうぞ」

美羽が隣を手で叩く。俺はそこに座る。

「なんかねえ……何話そうかなーって思ってたけど、大翔くんといられるだけでいいや。でも、一つだけ言いまーす。……大好き！」

美羽の言葉と同時に、雪が降り始める。

「降ってきたー。ホントロマンチックだよねー。私、幸せ……」

陽菜……見守っていてくれ……。

「……」

「……」

「美羽……別れよう」

「え？ なあに、大翔くん？」

「……別れよう……」

「え……？ どーせいつもの冗談でしょ？ 大翔くん、好きだよっ！」

「真面目に言ってるんだ。俺だって、美羽のことは好きだ。でも、美羽以上に好きな人が出来たんだ。だから、美羽とはもう付き合えない」

「た、大翔くん……??」

「美羽、今日まで過ごした時間、楽しかったよ。美羽と付き合えて、俺は幸せ者だった。美羽との思い出、一生大事にするから。今まで本当にありがとう」

「……大翔くん……!？」

「全てを捨ててでも、守りたい人が出来たんだ……。それは……美羽じゃないんだ。美羽……ごめん」

「どうして……」

「……」

美羽の目からは涙が溢れる。泣いているところなんて、本当に初めて見た。

「どうして!? これからも仲良くしようって言ったじゃない、ねえ！ わけわかんないよお……。大翔くん……！ ねえ、誰なの!？ 好きな人って……ねえ!!」

「……陽菜……なんだよ」

「陽、菜ちゃん……?」

「俺と陽菜は、幼馴染なんだ。俺は今まで、ずっと陽菜に支えてもらってきた。俺が興高に來れたのだって、陽菜のおかげなんだ。陽菜はずっと俺を見てくれていた。俺のことが好きだって言ってくれた。俺も……陽菜のことが」

「そんなの、ひどいじゃない!! だって私……私……本当に大翔くんのこと好きだよ……? うそじゃないよ……私だって本当に……好きなんだから……」

「……わかってる。美羽の気持ちは十分わかってる！ それでも俺は！」

「イヤーーーー！！！！ イヤ……もう……ダメなの……大翔くんがいないと私……生きていけないかもしれない……それくらい、好きなのに……」

「ごめん……」

「イヤー！！ 私……」

「お、おい、美羽！！！」

美羽は持っていたバグから小さなハサミを取り出した。そして、それで自分の後ろ髪をバツサリと切る。

「美羽……何を……？」

美羽の背中まであった長い後ろ髪は、肩にかかるかからないかほどの長さになった。文具用のハサミで切ったので、切り口がガタガタだ。……前に美羽自身が言っていた。女の子にとって髪の毛は、命の次に大事だって。それを、文具用のハサミで切った。美羽の長くて綺麗な髪は、見るも無惨なものになった。

「陽菜ちゃん……ショートヘアだったよね……」

「………??」

「ほら！ 私もショートにしたから！！ 他にも、陽菜ちゃんの真似、何だっけるよ？ こんなにお喋りな子だから嫌なの？？ だったらもつと喋るのは控えるから！ それとも、もつと……エッチなことしたいの？？ だったらいくらでもしていいから！ 今日だつて！」

「美羽……」

「ねえ……私、大翔くんが嫌なところは、何だっける直すから！ 大翔くんがしてほしいことだったら、何でもしてあげるから！」

「……美羽……」

「私……大翔くんの、望む女の子になるから……」

……美羽に、ここまで言わせている。美羽は、ここまで俺を望んでいる。それでも俺は、美羽の想いを踏みにじるんだ。

「美羽は……………美羽だろ？ 美羽は陽菜になれやしないし、なつてほしくはない。美羽には美羽の良いところがある。俺はそれをよく知ってるよ。……………美羽に直してほしいところなんかない。美羽にしてもらいたいことも……………ない。美羽は……………美羽は美羽でいてくれよ」

「……………大翔くん……………」

「陽菜な、合格発表の日に告白してくれたんだ。でも俺が、告白されたことを忘れていて。だから、陽菜には何ヶ月も待たせてしまったんだ……………。もしこれから美羽と付き合ったとしても、俺は美羽を通して陽菜のことしか考えられないと思う……………。そんなの、美羽に申し訳なさすぎるから……………」

「たい……………しょう……………くん……………」

「美羽、本当に……………たくさんの思い出をありがとう。美羽には感謝をしきれないよ。いや、感謝をする前に、謝らないとな。……………ごめん、本当にごめん。こんな最低な俺を好きになってくれて……………ありがとう」

「……………」

「……………」

「……………キス……………して？」

「……………？」

「最後に……………キス……………して？」

「ああ……………わかったよ……………」

何度も美羽としてきたキス。それも、本当にこれで最後だ。目をつむる。もう慣れた動作。そっと、唇を近づける。そしてお互いの唇を重ねる。今日一番初めに交わした甘い味のキスとは違い、涙がつたって、しょっぱい味のキスだった。

「大翔くん……………」

「……………ん……………？」

「……………大好き」

俺は出来る限り優しい目線を美羽に向ける。そして、美羽に背中

を向ける。

「……………さよなら」

クリスマスイヴの夜。雪がちらちらと舞う、公園のベンチの前で、俺達は……………別れた。

少し歩いたところで、俺はそつと後ろを振り返る。美羽がベンチで座っている。もうここからでは表情は分からない。ただ手で顔を覆っているので、泣いていることは一瞬でわかった。

「もう、いいよな……………」

笑ってさよならって思えたらどんなに綺麗だろう。俺は…………

「美羽……………美羽……………！ ああああ……………俺も好きだから

……………！俺も、美羽が、

大好きだから！！ねえ、なんでだよ……………なんでこうなんだよ……………俺が、決めたことなんだ……………でも……………う、うわああああ……………」

俺は……………泣いた。涙が、拭っても拭ってもどんどん溢れてきた。嗚咽をあげて泣いた。涙がなくなるのではないかというくらい、泣いた。

「うあああ……………美羽う……………美羽！！好きなんだよ……………美

羽……………！ああ……………うああ……………ごめん……………ごめん！！」

俺は美羽ではなく、陽菜を選んだんだ。俺が、そうしたかったから。誰かを傷つけずに生きていくことなんて、出来るはずがない。

「美羽……………う……………あり……………ありが、とう……………う……………」

ありがとう……………美羽……………ごめん……………ありがとう……………」

俺は一晩中、泣き続けた。

SIDE：陽菜

——今日はクリスマス。大翔くんに、空いてるか？って言われた。どうしたんだろう。吉村さんとケンカしたから相談に乗ってくれ、とかかな。でも、クリスマスに大翔くんと二人でいられるなん

て、嬉しい。まだ、大翔くんのが好きだから。

あの告白をした後は本当に辛かった。大翔くんも合格してるって勘違いして、一人で舞い上がっちゃって。大翔くん、絶対怒ってるはずなのに、私に話しかけてくれて。

好きっていう気持ちが止められなかったから、告白した。それで返事がもらえなかった上に私が勘違いをして傷つけてしまった。だから入学してからは本当に辛かった。でも大丈夫。もう、時間、経ったから。気持ち、楽になったから。良いんだ、この想いが届かなくても。大翔くんを、見ているだけで。

ピンポン。インターホンが鳴る。大翔くんが来た。どんな悩みでも聞いてあげよう。良いアドバイスは出来ないと思うけど。……大翔くんに、幸せでいてほしいから。

SIDE：大翔

陽菜。気持ち、伝えに来たよ。陽菜、本当に待たせて……ごめんな。

「よっ陽菜。足、大丈夫か？」

「うん、おかげさまで。軽傷だったから。……あの時はありがとね」「いやいやいや。良かった。それじゃ、ちょっとついてきてくれない？」

「……良いよ」

陽菜と会話を交わしながら、自転車である場所へと向かう。

「ここだ」

「え……興高？ 私服で入るの禁止だから、ドキドキするね」

「ああ。でも、どうしてもここが良いんだ」

「今日はどうしたの？ 吉村さんとクリスマス、良いの？」

「……実はな、美羽とは……別れたんだ」

「えっ……！？ どうして??」

「好きな人が、出来たんだ。……その好きな人っていうのは……陽

菜なんだ」

「えっ……………」

「陽菜。九ヶ月も待たせてごめん。美羽と付き合ってから、俺の本当の気持ちに気付いたんだ。陽菜のことが好きなんだ。今更だけど、あの時の告白の返事、まだ間に合うかな…………？」

「……………大翔くん……………」

堪えきれずに、目から涙を流す陽菜。

「陽菜…………ごめん…………ごめん！」

「うっん、私の方こそ…………。あの合格発表の日、勝手に勘違いしちゃって…………。気持ちも考えずに、本当にごめんね！」

「良いんだ、そんなの…………。忘れていた俺だって悪いんだ。陽菜…………好き、好きだ！一生そばにいて俺を支えてほしい」

「大翔くん…………私も…………ずっと好きだったよ…………。吉村さんと付き合ってるって知って、本当にショックだった…………。でも、大翔くんの選んだ人ならって、がまんしてた」

「ああ…………ごめん。でももう迷わない！陽菜…………俺、陽菜のことが好きだ。俺と…………付き合ってくれないか？」

「うん！喜んで！」

俺は、歩いていく。「これから」を、陽菜と一緒に。これから、何度も辛い思いをするだろう。何度も壁にぶち当たるだろう。でも本当に大切な、本当に大好きな陽菜と二人なら、乗り越えていける。そんな気がした。

君は君でいて（後書き）

最後までお読み下さり、本当にありがとうございました。ご意見ご感想等頂けるととても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0038b/>

君は君でいて

2010年10月8日15時51分発行